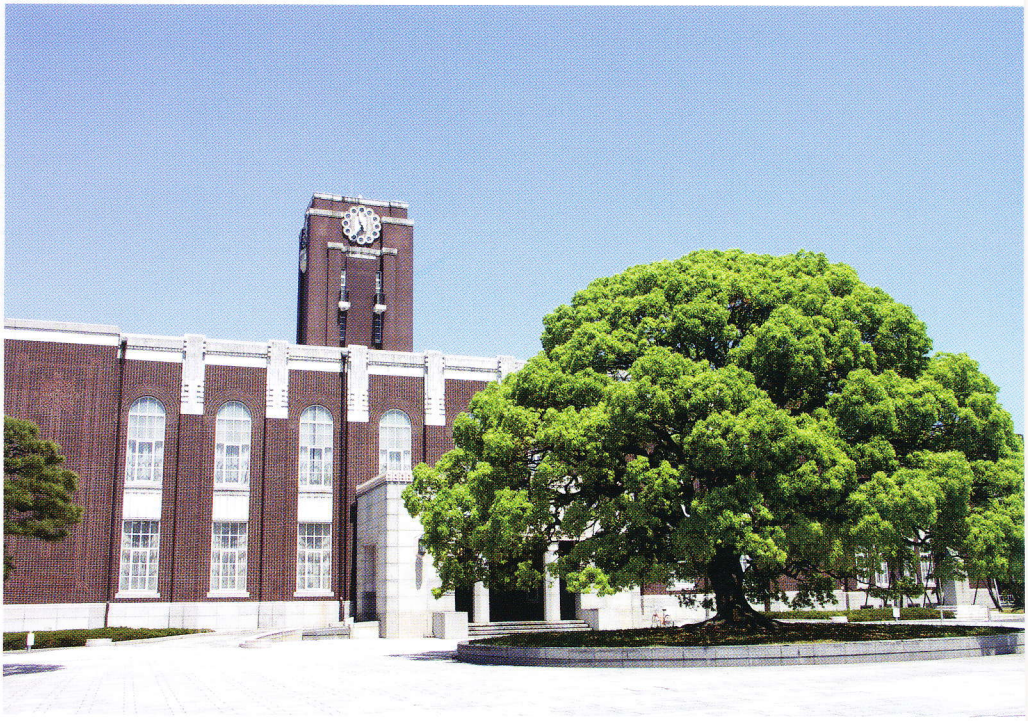
応用心理学のクロスロード



Vol. 02

2010. December

◉特集

日本応用心理学会第77回大会報告

JAAP 日本応用心理学会

巻頭言

日本応用心理学会の温故知新

日本応用心理学会副理事長　藤田主一（日本体育大学）

1998年9月に発行された『日本応用心理学会史―学会活動の変遷、回顧と展望―』には、本学会の歴史と現状が詳細に記述されている。その記録によると、昭和初期に関西と東京で研究会を重ね、関西では1927年4月に京都帝国大学で第1回の応用心理学会（会長は野上俊夫教授）、東京では1931年6月に東京帝国大学で第1回の応用心理学会が開催されている。1934年4月に第1回目の合同大会（京都帝国大学）、1936年4月に第2回連合大会（広島文理科大学）が開催され、第2回のときにはじめて「日本応用心理学会」という名称になったとある。学会名に「日本」が冠された最初である。ともあれ、京都という地は本学会にとって特別な意味合いをもっている。

2010年9月11～12日の2日間、京都大学で日本応用心理学会第77回大会が開催された。京都での大会は第65回大会（龍谷大学、会長は田中昌人教授）以来である。復興第1回大会が終戦後まもない1946年3月に日本大学を会場として開催されているので、今大会で77回目の歴史を数える。年度と回数が合わないのは、1957年の第24回大会までは1年に2度開催されていたからである。戦後の歴史のなかで学問の府である京都を舞台にしたのはわずか2回しかない。改めて振り返ると、田中真介大会委員長は第65回大会のときの事務局長も務められたので、同先生の本学会への貢献の高さが理解できる。

9月とはいえさすがに京都は京都らしく暑い日が続いた。東大路通を折れて吉田神社への道を上がると、正門の向こうに時計台記念館の威容が現われた。見上げていると何となく学問に立ち向かいたくなる衝動が湧いてくる。個人的な感傷に過ぎないが、自分を取り囲む建物という環境が大きく影響するように思えてならない。1879年にヴントがライプツィヒ大学に心理学実験室を開設したことは誰もが知っている。1980年7月にヴントをたたえる世界大会が同大学で開かれたとき、当時まだ院生だった私は飛行機を乗り継いで参加した。大学もさることながら、ライプツィヒの街並みに中世の面影を残す雰囲気があり、それだけでも参加した価値があったことを思い出した。学会参加の楽しみは、大学のたたずまいを体験することもひとつである。

かつての本学会には部会（犯罪、産業、教育、臨床、相談）が存在し、13の企画研究委員会もあった。全会員はどれかの委員会に所属したという。そのなかに体育委員会もあった。現在、私は体育大学に所属しているので関心が強い。今大会には体育・スポーツのワークショップが2件あったので、過去の大会でこの分野にどのくらいの研究発表があったのかを精査してみたが、非常に少ないことに驚かされた。

本学会は飛躍のために何度か脱皮している。応用心理学というキーワードにはさまざまな領域が含まれるが、本来の応用心理学が目指している社会的期待に向かって新たに前進していきたいものである。

CONTENTS

巻頭言　日本応用心理学会の温故知新　藤田主一 …… 1

特集　日本応用心理学会 第77回大会報告
——実践の中で人間を徹底して尊重する心理学をめざして …… 3
大会実行委員長からの報告　日本応用心理学会第77回大会を終えて—感謝と期待—　田中真介　4
参加院生からの報告　①「人とのつながりの大切さ」を実感　横井川美佳　7
②　たくさんの刺激や出会いを得た2日間　西村由美子　8
本誌広報委員からの報告　さまざまな工夫が施された大会　加藤博己・蜂屋 真　9

応用心理学 未来への展望
社会的責務を担う応用心理学　奥沢良雄 …… 10
心理学に出合えてよかった　恩田　彰 …… 11

特別寄稿　日本応用心理学会への期待　「エコとしての心理学史」の重要性　高砂美樹 …… 12

ホープ登場　クロスロードの星
⑥飯田敏晴［独立行政法人国立国際医療研究センター病院］　14　⑦渡邊ひとみ［同志社大学］　16
⑧藤浦(加藤)芳江［株式会社ベネッセコーポレーション］　18

現代社会と応用心理学
医療現場とリスクマネジメント　看護師をむしばむ医療事故への不安　原田博子・川本利恵子 …… 20

大学探訪　研究室におじゃましました　常磐大学人間科学部　申 紅仙 …… 22

職場探訪　科学警察研究所　関 陽子 …… 25

CROSSROAD ESSAY 私と応用心理学 ②
基礎心理学の視点から応用心理学を考える　荻野七重 …… 28

海外最新事情　第27回国際応用心理学会大会に参加して　大森哲至 …… 30

心理学から見たおすすめDVD紹介
『911ボーイングを捜せ』／『9/11：真実への青写真』／『911の嘘をくずせ』　いとうたけひこ …… 33

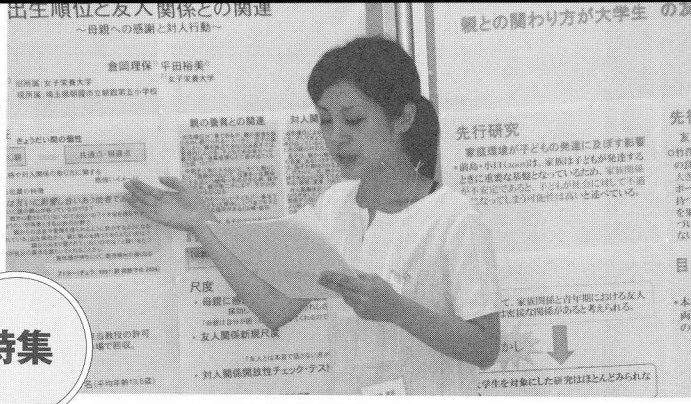
BOOK REVIEW 本を出しました …… 34
南 憲治『児童心理学の最先端』／秋葉英則『人に惚れて人になる』／松井 洋『インテリ公害』／
樋口康彦『男ひとりの老後にならないための55ヵ条』／緑川 晶『心の科学』／沢宮容子『改訂 人間関係学』

応用心理士の現場
からみあうニーズとシーズ　廣島克佳 …… 37

◆日本応用心理学会認定「応用心理士」2010年度後期資格認定申請のご案内　40

常任理事会通信
◆第27回国際応用心理学会大会（メルボルン）報告　41　◆機関誌編集委員会からのお知らせ　42
◆2010年度日本応用心理学会学会賞について／名簿の送付について　43
◆日本応用心理学会入会案内（申込書）　44

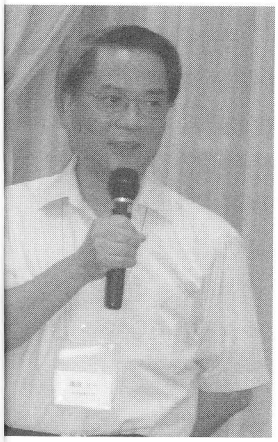
◆原稿募集　45　◆編集後記　46

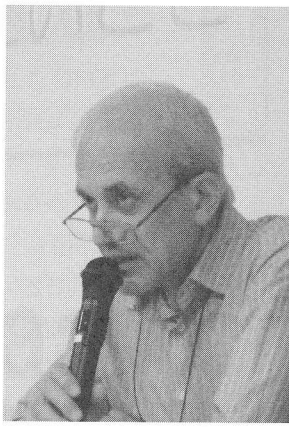


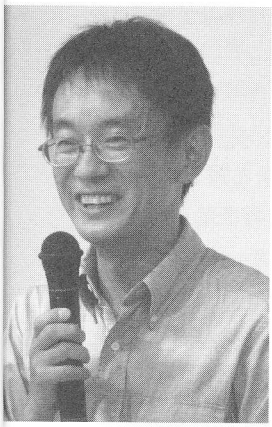
特集

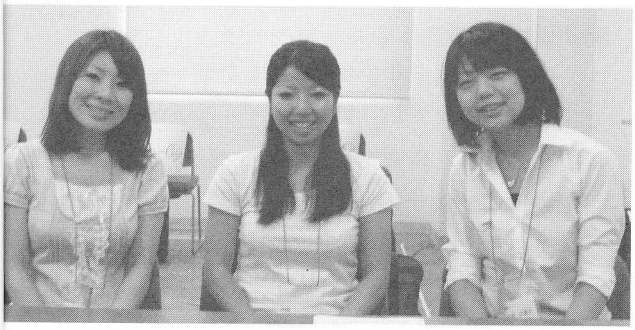
日本応用心理学会 第77回大会報告

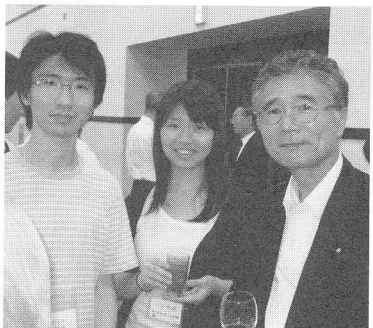
実践の中で人間を徹底して尊重する心理学をめざして











日本応用心理学会第77回大会を終えて
—感謝と期待—

田中真介

はじめに

日本応用心理学会第77回大会を、2010年9月11日（土）、12日（日）に京都大学で開催させていただきました。皆様から、104件の研究発表のエントリーと8件の貴重な自主ワークショップのご提案、それに学会企画委員会からは2つの研修会を提供していただきました。ありがとうございました。

国際連合は、2001年から2010年までを「世界の子どもたちのために平和の文化を提供し、非暴力を実現していくための国際10年」と提起しました。この課題を受けとめて、今大会では、『実践の中で 人間を 徹底して尊重する 心理学をめざして』を共通テーマとし、多彩な講演・シンポジウム・体験型企画を準備しました。

その結果、参加総数387名、懇親会は要員含めて192名のご参加があり、とても活気のある大会となりました。あらためて感謝申し上げます。ベテランの先生方のお声かけで、院生・学生の参加者数が例年の2倍近くの103名に達し、また、このうち47名の方々が研究発表を行ってくださいました。ポスター会場の活況に次世代の新しい息吹を感じることができました。

大会の概要

大会では、①研究発表のほかに、②大会記念企画資料展と記念シンポジウム、③大会企画8件（海外招待講演1、シンポジウム3、特別シンポジウム1、体験型ワークショップ3）を準備いたしました。また、阪上雅昭氏ら京都大学環on映画会スタッフの協力で、大会企画シンポジウムと関連の深い映画を6本上映しました（「夜明け前の子どもたち」「9.11の子どもたちへ」「夕凪の街 桜の国」「砂の女」「ゆきゆきて神軍」「父と暮せば」）。さらに、今回の大会では、次のような新たな取り組みを行いました。

1）大会準備方法について

学会事務局の国際文献印刷社の協力を得ながら、大会の案内・受付・準備・運営を基本的に実行委員会で手作りする方針をとった。

①大会参加・研究発表のための申込み方法をシンプルにし効率化した。大会専用ホームページを作成し活用した。大会プログラム、大会発表論文集を手作りした。②大会企画シンポジウムおよび映画上映会の開催にあたって、各企画それぞれについて実行委員で事前学習ゼミを行って内容の理解を深め、準備・運営に活かした。③大会概要紹介パンフレットを作成し、京都市内外の保育所や療育施設に案内した。④大会準備体制および大会そのものを青年期・成人期の発達研究の成果を活かして構成した。

2）大会当日の運営方法での工夫と特色

①「貸出用」「閲覧用」の大会発表論文集を準備した。②京都の残暑対策として、「うちわ」「熱中症レジュメ」を準備し全員に配布。ポスター会場と書籍・企業展示会場に扇風機を設置。③当日要員に社会人を起用するとともに、大会前後に院生・学生スタッフとの交流の機会を設けた。

3）研究発表について

①発表形式を「ポスター発表」に統一した上で5分間の「ポスタープレゼンテーション」の時間を設定し、研究交流の機会を充実させた。②別刷りコーナーの設置。③研究発表のアブストラクト（抄録）を大会ホームページに事前にアップし、情報を早期に公開した。

4）参加費用について

①「研究生」の参加費を減額した。また、「ふるさとおみやげ展示会」を作り、懇親会費を値下げした。②遠隔地（東北・北海道、九州・沖縄）から自己負担で参加された方に、図書券を渡して旅費負担の軽減を図った。

大会企画の趣旨と討議内容

1. 記念企画および記念講演

大会記念企画資料展「発達保障思想の原点と展望―糸賀一雄のラストメッセージ『この子らを世の光に』―」では、戦後のわが国の社会保障・発達権保障の礎を築いた糸賀一雄の資料展を開催しました。特に1930年代の学生時代から1960年代に近江学園で活躍した時期の糸賀一雄を中心とする近江学園グループの療育実践、そして現在の最先端の療育・発達研究に通じる重要資料を展示しました。

大会記念企画シンポジウム「発達保障論の成り立ち・現在・展望―近江学園における実践と研究の系譜から―」では、糸賀が設立し園長を務めた滋賀県立近江学園での療育実践の貴重な成果を紹介しました。高谷清氏からは「糸賀一雄の魂と思想」で発達保障思想の原点を、加藤直樹氏からは、糸賀晩年の「庇護授産所」(シェルタードワークショップ)の構想を、森本創氏からは、「近江学園の現状と課題―入所児童の変化の中で近江学園として大切にしたいもの―」について貴重な提起をいただきました。

大会記念講演「デジタルペンを用いた描画過程の自動分析」では、フランスの発達心理学者のフィリップ・ワロン氏をお招きし、描画研究の最新の成果をご講演いただきました。子どもたちの絵を見守る眼差しの温かさと、障害をとらえ子どもたちの発達を支えようとする科学的な姿勢の両方を大事にされている姿勢がよく伝わってきました。

2. 大会企画シンポジウム

本大会では、本大会のテーマの精神である「生命の尊重」と対極にある諸問題を取り上げ、問題の歴史と構造を考究しました。それをもとに、人間が人間を人間でなくそうとする大きな力に対して、人間を大切にする文化を育てることによって平和を支え、人々を助けていきたいという国連や本学会の平和・人権・発達尊重の思想は、今後どのような社会実践によって実現していくことができるかについて考え合いました。

時計台

特別シンポジウム「9.11の子どもたちへ」では、本シンポのちょうど9年前の2001年9月11日にアメリカで起こされた「同時多発テロ事件」(9.11事件)に関する諸分野の基礎研究の事実資料をもとに、国家による戦争行動を制御し、平和を構築していく際の課題について問題提起していただきました。また、映像資料等を利用した情報操作によって世論がどのようにつくり出されていくかに焦点をあて、すべての人々の生命・健康・発達を守り育てるために、普遍的な価値を発見し尊重し共有していく人間諸科学のひとつとして、心理学がどのような意義と役割をもつかについて討議しました。

シンポジウム1「予防接種被害と心理学の役割」では、1948年に京都と島根で起こった「ジフテリア予防接種被害事件」を取り上げました。本事件に関する歴史資料を発掘し、当時の日本政府とアメリカ政府の医療政策の闇が浮き彫りにされました。さらに、このような被害を受けた子どもたちや家族に対してどのような心理学的・医学的・社会制度的な支援が必要なのかについて討議しました。この研究には、「2008年度ノーモア薬害ヤコブ人権賞」が授与されました。

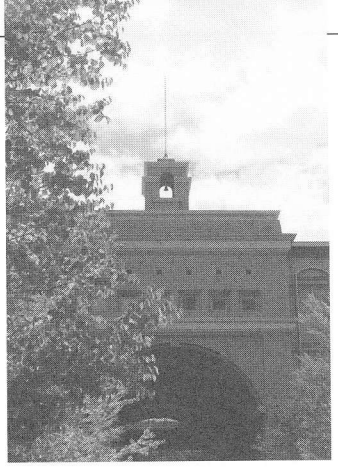
大会2日目のシンポジウム2「臨床の場で大切にしたいこと」では、人間の行動や心の病、その徴候、障害、回復の過程を、第一線の実践者たちがどのように読み取り、受けとめ、支えてきたかを紹介しました。特に①精神医学と小児療育の臨床場面での子ども理解・人間理解、②診断や治療・臨床相談活動のなかで最も大切にされていること、また、③病気・障害のもつ意味の発見、これらの観点について貴重な提起をいただきました。ジャック・キルツェンブラ

ット氏は、日本の映画作品を起点に、「科学的姿勢と臨床的姿勢」「臨床場面での出会い」「治療的な関係」「ギフトの意味」「発達権の発見」等について話題提供してくださいました。それを受けて奈須康子氏は、重度の障害のある乳幼児たちを対象とする臨床場面での経験をもとに、「子どもの声なき声を読みとり感じ取る医療のあり方」、「診断でなく、愛される対象として子どもを見ることの大切さ」を問題提起してくださいました。

シンポジウム3「発達診断の役割と可能性」では、小倉直子氏から発達診断事例の報告を受けて、発達診断が果たすべき役割と将来のよりよいあり方について討議しました。発達診断とは本来、人間として共通する発達の道すじを踏まえて、今どのような要因によって発達要求の実現が困難になっているのかを認識・把握し、保育・教育・療育実践や社会システムのよりよいあり方を視野に入れた具体的な手立ての提起を行おうとするものです。そのためには、人間の発達をスキル獲得や適応の過程ではなく、「みずから外界に働きかけて外界を変化させ、そうすることによって同時にみずからの内面を豊かに創造していく過程」ととらえ、「発達の原動力」の生成・発展・充実の過程をきめ細やかに評価把握し、そしてそれらを阻害している社会的要因を確実にとらえて改善していく必要があることが提起されました。

3. 大会企画・体験型ワークショップ

今大会のもうひとつの特色は、多彩な「体験型企画（ワークショップ）」を通じて、新しい時空間のなかで新たな自己、新たな仲間との出会いを直接経験していただいたことです。体験型企画1「プレイバックシアター」では、橋本久仁彦氏を講師に迎えて、仲間とともに演じる演劇の力が、私たちの心の痛みをどのようにして癒していくのか、1人ひとりの切実な願いをどのように受けとめ実現への扉を開いてくれるのかを体感していただきました。体験型企画2「みんなでつくる音の輪（和）」では、世界的な現代音楽の作曲家、松尾祐孝氏をお招きして、



「京都大学吉田南構内」にある「吉田南総合館」の屋上には、「自由の鐘」が据えられています。この「自由の鐘」は、京都大学が「第三高等学校」（三高）と呼ばれていた頃から、京大の「自由の学風」の象徴として大事にされてきました。

いつでもどこでも誰とでも、ともに音楽をつくっていけること、私たち1人ひとりの個性が楽器となり、音楽となり、自分なりの音と発想を大切にしながら1つの作品そのものとなる瞬間を体感していただきました。体験型企画3「人形劇を楽しむ」では、人形劇団もぐらの協力を得て、「だるまちゃんとかみなりちゃん」そして、この2人を温かく見守る「かみなりのお父さん」が登場。人形劇の楽しさを実感していただくとともに、劇鑑賞のあとには、劇団員の方たちとの交流を行い、人形劇を取り入れ実演するときの工夫やコツを伝授していただきました。

おわりに

感動が自己を世界に位置づけ直し、感動が私たちの世界を新たにしていきます。それは社会のなかでの新たな自分の位置の発見となり、それによって私たちは、まわりの世界を新たに認識する力を得ることができるでしょう。そしてさらに、感動は、未知のよりよい新しい社会をつくる力につながっていくことでしょう。

今回の大会のシンポジウムやワークショップ、そしてご研究発表を通して、大会に参加してくださった皆様が、貴重な一生の宝となるようなものと出会われ、明日への大きな力を得られたことを期待いたしております。大会を盛り上げてくださった参加者の皆様、また、全力を尽くして大会を支えた実行委員と当日スタッフに、記して深謝の意を表します。

たなか・しんすけ◉京都大学高等教育研究開発推進センター准教授。大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻を兼任。専攻は発達論・発達診断学・神経科学。

●参加院生からの報告①

横井川美佳

「人とのつながりの大切さ」を実感

暑かった2010年の夏。大学院に進学して以来、ほとんどこの大会の準備しかしていなかったといっても過言ではありません。そんな半年間を振り返ってみようと思います。

今回の実行委員会にかかわらせてもらい始めたのは、昨年の暮れのことでした。最初に参加していたのはたったの7人。「こんなに少人数で大丈夫なんだろうか」と、とても不安に思っていました。

私の最初の大きなミッションは、大会プログラムの日程や会場地図の作成・編集でした。大会プログラムのなかでも一番参加者の人が目にするページ。何度も何度も編集長とミーティングを重ね、「参加者の方がどのようなときにこのプログラムをみるか、必要とするのか」ということを念頭に置き、妥協をせず納得するまで改訂をしました。

懇親会の企画・運営も担当させていただきました。今大会の懇親会では、新しく「お土産コーナー」というものを企画しました。このコーナーの意図は、参加者の方からお土産を募ることにより、各地の特産物等を知り、また、それを通してさらに交流を深めるということでした。おかげさまで、多くの方からお土産を提供していただき、懇親会がとても華やかになりました。ありがとうございました。また、このコーナーの設営では、当日スタッフの方々に本当に助けていただきました。「懇親会は準備が詰められていないので、みなさんと一緒に作り上げたいと思います」という前日説明会での無茶な依頼に対し、本当に丁寧に対応していただきました。

最終的に実行委員のメンバーは、13人となりました。少人数のなかで、誰もが重要な役割を担っていて、誰一人欠けても成り立つことができなかったと思います。振り返ってみると、もっと効率よくできたこともたくさんあったのかもしれません。ただ、その一瞬一瞬で、実行委員のメンバーそれぞれが、自分のしなければならないことを、手さぐりに一生懸命取り組んでいました。それが、今大会のこだわりである「手作り」のよさだと思います。

「お土産コーナー」各地の地酒もたくさんいただきました

今回、実行委員をさせてもらったことで、本当にたくさんのことを学ばせてもらいました。そして、それらはすべて「人とのつながりの大切さ」ということに帰結するのではないかと思います。多くの人と接したことで、人を動かすことの難しさ、人に協力してもらったときのありがたさを再認識し、人に思いやりをもって丁寧に接することが、人とのつながりを広げていくための一番の近道だと改めて感じました。

学会が終わった今、やっと本腰を入れて研究に取り組もうとしているところです。研究を進めるなかでも、また、社会人になっても、今回の学会の実行委員をして学んだ、人と人とのつながりを大切にしていきたいと思います。大会に参加して下さった皆様、また、右も左もわからない私を支えて下さった実行委員の皆様、本当にありがとうございました。

よこいがわ・みか◉ 1986年滋賀県生まれ。2010年京都大学医学部保健学科理学療法学専攻卒業。現在は同大学人間・環境学研究科共生人間学専攻の1年生。小児病院での実習などを経て、障害児を取り巻く医療と福祉の連携関係に興味を持つ。第77回大会を終えた現在、「人と人とのつながり」を大切にした研究を目指して、日々奮闘中。

西村由美子

たくさんの刺激や出会いを得た2日間

大会の印象は、シンポジウムや体験型企画、自主企画ワークショップの数が多いことに驚き、どれに参加するか迷うほどでした。魅力的なものが多かったのですが、なかでも「医療におけるカウンセリング体制とは？―導入から定着までの課題と展望」の自主企画ワークショップは大変勉強になりました。というのも私の母が病院で主任看護師として働いているのですが、この病院には精神科がなく、EAP も配置されておりません。よって母の相談相手は私になります。母の相談を聞きながら、「臨床心理士が病院へ介入していくにはどうすればいいだろうか」「もし私が医療の現場で医療従事者を対象としたカウンセラーとして働くなら、どのような支援ができるのだろうか」と考えているところに、今回のワークショップに出合いました。ワークショップで発表された先生方は医療現場における心理士として最前線に立っておられる方々で、なかでも飯田亜佳先生は私の考えていた病院職員のためのカウンセリングセンターを導入、展開されており、大変勉強になったと同時に、とてもよい刺激になりました。

また今回は、ポスター発表と大会運営のお手伝いをさせていただきました。

ポスター発表では発達・教育の領域で、「親との関わり方が大学生の友人関係に及ぼす影響」という研究を発表しました。最初は緊張して、どうにかなってしまいそうでしたが、多くの方と意見交換ができ、新しい視点を学ぶことができました。また、自分の知らない分野でも、目の前にポスターがあることで感化され、興味につながったことが嬉しく思います。

また、2日間の大会運営のお手伝いではたくさんの出会いがありました。学会当日はクロークと懇親会を担当しました。クロークでは龍谷大学の院生と協力し、荷物をお預かりしました。

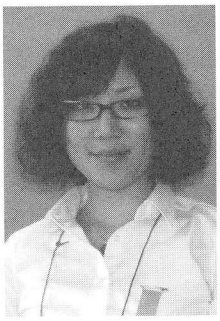
緊張したポスター発表

たくさんの方に参加していただいた懇親会

私は出身大学が龍谷大学なので、偶然ですが久しぶりに龍谷大学大学院に入った同期と再会し、それぞれの大学院について語り合うことができました。主催大学をはじめとして、他大学院の方と研究の話や、ときには悩みを話せる機会ともなり、嬉しかったです。

懇親会会場である時計台記念館は大学のなかとは思えないほどの豪華さで、「全国おみやげ展示会」では餃子やお菓子、お酒など多くのお土産が届けられ、行列ができるほどの大盛況でした。参加者の方々と一緒に乾杯をしたり、はじめてお会いする方々とお話ししたりと、とても楽しい時間を過ごすことができました。

貴重な体験をさせていただきありがとうございました。



にしむら・ゆみこ◉ 1987 年大阪府生まれ。龍谷大学文学部を卒業。現在は帝塚山大学大学院人文科学研究科の１年生で、臨床心理士の資格取得を目指すコースに所属している。学部生時代に、大阪府の私立幼稚園で活動しているキンダーカウンセラーを知り、保育所・幼稚園場面で働く保育士・幼稚園教諭への心理教育研究に関心をもつようになる。

加藤博己・蜂屋 真

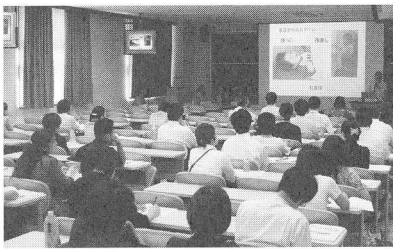
さまざまな工夫が施された大会

京都大学における日本応用心理学会第77回大会は、両日とも天候に恵まれ、参加者は、夏日のなかを配布された特製うちわを片手に、熱心に演者の声に耳を傾けていました。本大会では、たくさんの工夫を凝らした新しい試みがなされていました。まず、本大会のプログラムは、①「頭で理解する」：研究発表、シンポジウム、ワークショップ、ポスタープレゼンテーションなど、②「体で体験する」：体験型企画（プレイバックシアター、音づくり、人形劇）など、③「心で感受する」：映画会、能上演、懇親会・交流会、スタッフのきびきびした動き・気持ちを読み取った接客姿勢・全体構成など、という3部構成からなっていました。

そのなかでも、特に目を見張ったものとして、発表形式を「ポスター発表」に統一し、ポスター発表会場を複数に分け、5分間の「ポスタープレゼンテーション」の時間を設定したことと、発表内容の抄録を、大会ホームページで自由に閲覧可能にしたことが挙げられます。また、ポスター発表を1日1セッションのみに設定したため、研究発表会場、講演、シンポジウム、体験型企画、自主企画、研修会の各会場も、人が分散せず、盛況だった印象があります。

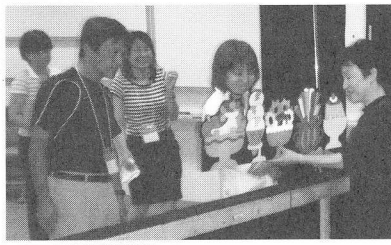
体験型企画「人形劇を楽しむ」の会場や、自主企画「教育現場におけるアドベンチャーカウンセリングの実際②」の会場では、参加者が劇を間近にみて、さらに、楽屋側に回ってその仕組みに驚いたり、ペアや集団となった参加者が、和気あいあいと楽しみながら、体験を通して理解したりと、本大会ならではの特色が現れていました。

また、大会記念企画資料展「発達保障思想の原点と展望」、同シンポジウム「発達保障論の成り立ち・現在・展望―近江学園（糸賀一雄園長）における実践と研究の系譜から―」が開かれ、ハウツーものが求められる現代において、1対1の人間関係の重要性が紹介されました。



記念企画シンポジウムの様子

記念企画資料展



体験型企画「人形劇を楽しむ」

5分間の「ポスタープレゼンテーション」

さらに、本大会は、学会活性化の試みとして、「大会発表賞」が設けられ、参加者による投票が行われた初の大会となりました。この企画により、プレゼンテーションに対する発表者の意識や、発表に傾聴する参加者の意識が高まり、研究発表の場をさらに盛り上げることとなりました。

かとう・ひろき◉駒澤大学文学部
はちや・しん◉流通科学大学サービス産業学部

本学会の名誉会員に応用心理学との出会い、応用心理学への期待などについて語っていただきました。

社会的責務を担う応用心理学

奥沢良雄

おくさわ・よしお
1951年東京理科大学教育学科（心理学科）卒業。埼玉大学保育学科・大妻女子大学教授、同狭山台校主幹。筑波大学・早稲田大学非常勤講師。1965年、フルブライト研究員（南イリノイ大、カリフォルニア大）。元犯罪心理学会役員。日本応用心理学会名誉会員。臨床心理士、元東京都教育委員会スクールカウンセラー。現在、関東医療少年院・府中刑務所の篤志面接委員、同全国連盟役員。面接相談開業。

日本応用心理学会から今回の執筆依頼の連絡があった。長い御無沙汰にもかかわらず思い出していただいたこと、有り難い極みであったし、昔からお世話になった先生方のことなども思い出し、会員としての幸せをかみしめている。

実学的な応用心理学との出会い

長い間に、応心の事務局も、慶応の日吉の校舎から三田の校舎、駒沢大学の校舎などと移り変わり、それぞれの風情も懐かしく、ベテランの先生方のお話はどれも含蓄に富み、種々教えられたことなど、しみじみと思い出される。

戦後間もない頃の大学での心理学には、期待を満たされない思いを抱かされることも少なくなかった。心理学科は哲学科や教育学科、生物学科に属していたりで、この学問の本質の理解に苦しむことが多かったなかで、比較的わかりやすかったのが「応用心理学」という語だった。

それはその語が、物事の細かい詮索より、現実的取組を率先していることを示しているようで、それが気に入ったからである。「応用」という言葉からは、まず、実学的な抱負が豊かに思い浮かべられた。

学問の意味、意義について今更ここで詳細に述べる気持ちはない。しかし、その実学的な意義については、「応用心理学研究」35巻1号、編集後記に記されているように「Sollen」的視点を重要視していこうではないかとの趣意に賛意を表したい。

私は長く教育の現場に関わってきた。幼くは幼稚園から、小学校、中学、高校、大学、その職務としては、第一線の教員から管理職と、いろいろな経験をさせていただいてきた。そして最近は個人的に心情相談にあずからせていただいている。この間常に思うのは、生きている人の援助には、観察、分析等の時間的余裕はないということである。この人々への対応は、少し待ってからというのでは始まらない、「Sein」としての基礎的な情報、技術、装置等の大切さはいうまでもないが、生きている人を対象とするとき「観察」や「待ち」の時間は考えられない。応用心理学はそのような社会的責務を担っているものである。「観察」はあってもそれは働きかけと同時一体のものとして行われる。

それぞれの「クロスロード」

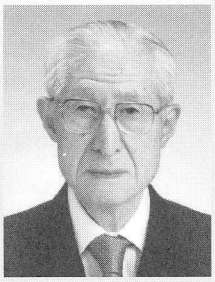
私は今、85才。小学校を卒業して70年余になる。そして、ここ数年、同じ小学校のクラスの卒業生と、年に数回同級会を開いている。今は6人ほどが常連である。

半日の交友のなかに、旧交を温め、お互いの健康をいたわり、日々の充実を励まし合い、それぞれの生きがいを確かめ合って、満たされた心で別れてゆく。時折のこの会は、我々の人生の1つの「クロスロード」、再生の場所となっている。

「クロスロード」が、その場に集う人々の充電、自らの同一性や生甲斐の確認が果たされてゆく場所であるならば、それは、まさに人々の未来につながる礎になっているもの、といえよう。人それぞれの「クロスロード」に幸せ、あれ。

心理学に出合えてよかった

恩田　彰



おんだ・あきら
1948年東京大学を卒業。現在は東洋大学名誉教授（文学博士）。日本創造学会名誉会長、日本応用心理学会名誉会員、日本心理臨床学会名誉会員、日本カウンセリング学会名誉会員、日本催眠医学心理学会名誉会員、日本心理学会終身会員。主な著書は『創造性の研究』、『創造心理学』、『創造性開発の研究』、『創造性教育の展開』、『禅と創造性』、『仏教の心理と創造性』（以上何れも恒星社厚生閣）。

応用心理学との出合い

私が応用心理学と本格的に出合ったのは1948年東京大学心理学科を卒業し、労働科学研究所に1年間研究生として産業心理学に産業の現場でふれたことに始まる。当時所長に桐原葆見先生がおられた。ここでの経験が私をして今日まで応用心理学につなげる契機となった。それから東京学芸大学附属中学校の社会科の教師として5年ほど勤めたが、これが後に教育心理学の研究、特に創造性の心理と教育に関する研究の基礎になった。その後、東洋大学でアメリカ人で精神分析学のバーグ，M.教授に出会い、心理療法の指導を受けることで、心理療法（カウンセリング）の研究を行うようになった。

東洋大学を創立した井上円了は、東京大学の哲学科の出身であるが、独力で欧米の心理学の文献を読み、多くの心理学の著書や論文を残している。また心理学の日常生活への応用を重視し、応用心理学の講義を1887年から哲学館（東洋大学の前身）で始め、応用心理学の諸分野を開拓している。

宗教心理学への期待

私は1942年に東京高等学校に入り、小保内虎夫先生から心理学の講義を受けることになり、それまで印度哲学か宗教学をやろうと思っていたところ、心理学が人間の基本的な学問であることを知り、将来心理学特に宗教心理学を研究したいと思うようになった。この面の研究は、禅の心理学的研究において実現する。1961年、1962年に東洋大学学長佐久間鼎先生を班長として「禅の医学的心理学的研究」（文部省総合研究）に参加するようになり、私は「禅と創造性」の研究を行うようになり、今日に至っている。

私はかねがね日本応用心理学会のなかに宗教心理部会があったらいいと思っていた。1970年シンポジウム「禅の主体性の回復」で「禅と創造性」について発表した。1976年公開シンポジウム「現代における宗教の問題と心理学」を企画司会した。1995年大会シンポジウム「死と再生の現代における意味」恩田の企画・発表、中村昭之先生の司会。1995年公開シンポジウム「心のコントロールをめぐる諸問題」恩田の企画・司会。私が特に注目したいのは、1971年大会シンポジウム「東西サイコセラピーの見方と展開」である。佐藤幸治先生が企画されたが、直前に亡くなられたので、司会は松村康平先生。佐藤先生の要旨では、曹洞系の禅の研究方法や研究態度を批判されていた。佐藤先生は臨済系の禅の立場、これに対して曹洞系の禅の立場である秋重義治先生が、それに反論している状況はすごく斯界の両権威が激しく討論されているようで、感動を覚えたものであった。

このように宗教の問題はかなり取り上げられている。最近若い人たちが宗教心理学研究会を立ち上げ、定期的に宗教心理学の問題を論じ合っている。日本宗教心理学会の設立が計画されているが、その動向に期待したい。

特別寄稿

日本応用心理学会への期待

「エコとしての心理学史」の重要性

高砂美樹

応用心理学から基礎心理学へ

最初に編集部からいただいた仮題は「基礎心理学から応用心理学へ」だったが、現在の専門である心理学史が応用心理学とは思えず、あえて逆転させてみた。

実験の日々：基礎というより応用？

私が筑波大学の人間学類（現：心理学類）へ入ったころは、心理学に関心があったとはいっても、現在の臨床心理学のようなものではなく、睡眠の大脳生理学のようなものを研究してみたいと漠然と思っていた。臨床心理学というのは床という文字が使われているから睡眠と関係があるはずだと思い込んで、書店で臨床がらみのテキストを立ち読みしてみたが、まったく興味がわかなかった（そんな自分がいま臨床心理学研究科を教えているのは皮肉なものである）。おまけにヒトでは睡眠といっても脳そのものを扱えるわけもなく、心理学でできることは限られていたので、やがて、生理心理学の研究室に出入りするようになった。

気がついてみるとラットを相手に研究をする日々で、80年代をまるまる筑波の地で過ごした。ラットであれば脳研究ができるのだが、私が選んだテーマは学習をベースとした行動の変化で、それが脳内のドーパミン系とどう関係があるかというものだった。先行研究にならって、6-OHDAという神経毒を仔ラットの脳内に投与し、成体になるまでの長期間にわたって縦断的に行動の違いを検証するのだが、この脳内のドーパミンが減少したラットは今でいうとADHDのモデルの1つでもあった。80年代はまだDSM-ⅢからDSM-Ⅲ-Rの時代であり、そのころはADDとかADDHとよばれていたが、まだ一般の人が知るところではなく、知り合いの小児科の先生も診断が難しいといっていたことを覚えている。学位論文はこの6-OHDAを新生仔期に投与されたラットの行動変化をまとめたものである。

動物実験というと基礎心理学のように思われるかもしれないが、実際の研究テーマが臨床モデルということもあり、発表する雑誌や学会も精神薬理学や神経科学の領域が多く、そういう意味では限りなく応用心理学に近いものであった。実際、日本経済がバブル期を迎える80年代後半になると、研究室の先輩は相次いで製薬会社に勤めるようになっていた。今でいうところの認知症の薬の開発に、動物を用いた記憶の実験が欠かせなかったからである。

1991年になると合衆国ミシガン州アナーバー市に住み、同市内のミシガン大学医学部にある行動薬理学の研究室でポスドクとして働いた。ここは薬物依存が形成されるかどうかを動物実験で検証しているところで、行動分析が基本にあるため、Woods教授をはじめとして研究室には心理学者が多かった。やがて2年も満たないうちに日本に戻ることになったが、その頃にはバブルもはじけて、製薬会社での就職も厳しくなっていた。それでも大学で任期付きの技官や助手として働くうちに、縁があって八王子の短大の講師として赴任することになった。

実験から歴史へ

短大講師というのは何でもありの世界であり、教育心理学や臨床心理学などもある程度こなせないとならず、今までかなり専門的になりすぎていた自分の知識を再構築する日々が続いた。おまけに、研究環境がそれまでとはがらっと変わってしまったので、自分は何をこれから研究するべきかについて考えを決めないとならなかった。予算がつかないので、実験系は厳しいかもしれない。か

といって、いまさら臨床心理学を研究しようという気にはならない――そんななかで、あっさりと落ち着いたのが心理学史である。

心理学史への関心はこのとき急に目覚めたわけではない。もともと、80年代当時は大学院の入試に第2外国語の試験が必須であり、自分のいた研究室でも先輩が後輩に教えるような習慣が残っていた。私も大学院に入ってすぐに後輩のためにドイツ語のテキストを探したが、そのときに広く学ぶなら心理学史がいいかもしれないと思っていた。偶然、その頃出版された本にLück他編『心理学史：キーワードによるハンドブック』(1984)があった。この本との出会いはある意味で、その後の心理学史との関係を変えるものであったかもしれない。というのも、この本にはナチス時代の心理学史に関する一章があったからだ。「ナチス時代にむしろ心理学は専門職として進展した」という内容ははじめて読む印象的なもので、もともとは後輩に教えるためのテキストだったが、すっかり自分が勉強する方にまわってしまった。

この勉強はのちに別の形で活きることとなった。助手が終わる年の日本心理学会で、《心理学史研究を始めよう》というノリの若手グループの口頭発表があったのだが、たまたまそのセッションに参加して、ナチス問題について日本にも研究があるのかどうかを質問してみた。そういうこともこれから研究が必要だと思います、というのが回答だったように思うが、この質問が縁となってサトウタツヤ（立命館大学）他の心理学史研究者と知り合った。短大の講師になってからは、しばらく日本の心理学史と古書にみる生理心理学を中心に独学で心理学史を続け、前者の研究はのちにサトウ・溝口編『通史　日本の心理学』(1997)に結実し、後者のほうはSfN（北米神経科学会）での発表につながった。

SfNは巨大な学会であるが、歴史セクションをきちんと設けていて、ポスターは一週間貼り続ける。1997年に生理心理学の初期の歴史について発表したとき、この歴史セクションだけが独立して学会を作るので、そこで発表したらどうかと誘われた。それがISHN（国際神経科学史学会）である。1999年にWundtの初期の神経観について発表したとき、そこにいた心理学者にCheiron（国際行動社会科学史学会）を紹介され、さらに欧州版CheironのESHHS（欧州人間科学史学会）に入会した。海外の学会を体験するうちに、これが自分にとっていい勉強になることがよくわかった。日本の歴史学者と異なって、海外の歴史学者は心理学史などにも積極的に関わっており、彼らの枠組が心理学しか知らない自分には新鮮だったのだ。たとえば、応用心理学の歴史などは、まさにその当時の社会が何を心理学に求めていたのかという視点を欠いては理解できないところがあるが、独学では背景にある経済的・政治的状況まではなかなか気づかないものだ。

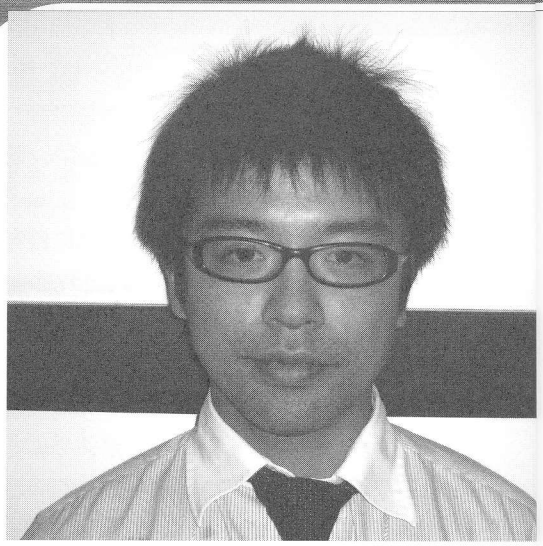
高砂美樹（たかすな・みき）◉ 1962年茨城県生まれ。1991年3月筑波大学大学院心理学研究科を修了。学術博士。ミシガン大学医学部博士研究員、筑波大学心理学系助手等を経て、2001年から東京国際大学人間社会学部教授。同大学院臨床心理学研究科も担当。専門は心理学史。主著に『心理学史』(放送大学テキスト　西川泰夫共編著)、『流れを読む心理学史』(サトウタツヤと共著）など。心理学以外にドイツロック史などの研究もある。

課題や理論は繰り返す

残念ながら、日本では心理学史に関心をもつ心理学者が多いとはいえない。「何でこんなことやっているんですか」という質問が相変わらず多いのも事実だ。神経科学に限らず心理学においても、最新の知見が大事であり、昔の考え方は必要ない、というスタンスが少なくない。ところが、新しい時代のものが最新であるとは限らないことが、心理学ではよくある。テクノロジーは最新の時代にはかなわないとしても、課題や理論などは忘れられた過去の研究の焼き直しということがあるのだ。その意味で心理学史はエコでもある。私としては、日本で2番目に古い心理学会でもある日本応用心理学会の個人発表に心理学史ものがたくさん出てくるところまで関心が高まり、国際応用心理学会でも歴史セクションが作られることを祈るところである。

ホープ クロスロードの登場 星⑥

日本応用心理学会の未来を担う期待の若手ホープを紹介します。



独立行政法人国立国際医療研究センター病院
エイズ治療・研究開発センター
財団法人エイズ予防財団リサーチ・レジデント

飯田敏晴

自己紹介

はじめまして。私の日本応用心理学会とのご縁は、井上孝代先生のおすすめにより、2004年度の入会から今日まで続いています。入会当初は、修士課程に入学したばかりでまさしく右も左もわからない状況でした。明治学院大学は、実践と研究の両面を重んじる教育モデル（ボールダー・モデル：The Boulder Model）を大切にしており、私の職業的発達に大きな影響を及ぼしていると思いますし、学会でお会いした多くの先生方、先輩方からの励ましや建設的なご意見によって、なんとか今日まで歩んでこられたように思います。

研究紹介

● 学部時代

私は、人間が自身の力では解決できない問題に直面した際に、周囲の援助資源に援助を求める行為（Help-Seeking Behavior）に関心があります。卒業論文執筆時には、大学生が周囲の援助資源に援助を求める意図を低減する要因に着目した研究を行いました。人に援助を求める行為は、時として自身の否定的な情報の開示（Distress Disclosure）を伴い、援助を求める行為自体が脅威となりうること（Treatment Fearfulness）から、これらの要因が援助を求める意図を低減するという仮説のもと調査研究を行いました。仮説は概ね支持され、その成果は、第71回大会（日本大学 大会委員長：嘉部和夫先生）において発表しました。

● 修士課程在学時

修士課程在学時は、子どもの心理社会的問題の深刻化を防ぐために、保護者が早期に問題を認識し、適切な時に援助を求めることができるよう、保護者の専門機関に援助を求める行為に対する態度を測定する尺度を作成しました。中学生の保護者を対象とした調査によって、尺度が完成し3つの因子を見出しました。すなわち、①専門機関に対する不信感、②親としての脅威、③子どもへの影響、の3因子です。その成果は、第47回日本教育心理学会大会（岡山大学 大会委員長 田中宏二先生）において発表しました。

● 修士課程修了後～実践へ

修士課程修了以降は、いくつかの医療・福祉領域の現場での心理臨床活動に従事しています。その活動を通じて出会った1人のHIV陽性者から聞いたことが、今日の研究テーマとなりました。HIV/AIDSは、以前の「感染＝死」という疾患から、多剤併用療法（HAART）の開発によって医学的なコントロールが可能な慢性疾患扱いとなりました。このため、以前と比べ、さまざまなライフサイクル上の選択肢を減じない形での生活を過ごすことが可能となりつつあります。しかし、根強い偏見が未だ存在し、HIV陽性者の生活の質の向上に資することは喫緊の課題であるといえます（飯田・いとう・井上，2010）。私がこの方からお聞きしたことは、当事者の方が人間の性行為について触れた講演に参加された際の講演内容とご本人の心情に触れるものでした。講演では、医

いいだ・としはる◉明治学院大学文学部卒業後、明治学院大学大学院心理学研究科修士課程、博士後期課程に進学。福祉作業所支援員、都内総合病院、クリニック、保健所デイケア等の心理職、大学非常勤講師を経て、2010年より財団法人エイズ予防財団リサーチ・レジデントとして、独立行政法人国立国際医療研究センター病院 エイズ治療・研究開発センターにて勤務。専門は、臨床心理学、コミュニティ心理学の分野で、特に、HIV/AIDSに関するスティグマ低減や感染予防の啓発に関わる研究を実施している。

学の進歩によって死に至る疾患が減ったものの HIV/AIDS は違うので感染しないための行動を心がける、といった内容であったそうです。その方は「自分は1人」と感じたそうです。この「1人」というのはこの方にとってどのような意味が込められていたのでしょうか。もしかしたら、自身は死ぬ存在である、とか、人とは違う属性、それも HIV 陽性という致死性の高い特性を背負っている、または規範からの逸脱した人間である、とご自身のことを責めたり、孤独さを覚えたのかもしれません。講演者も目の前に当事者がいると思わなかったかもしれません。こうしたことに思いを巡らせていくうち、これは個人の認識の問題ではなく、さらに講演者だけに責任があるわけでもないと思い至りました。HIV/AIDS の新規報告件数は今も確実に増え続けていますし、その感染経路はさまざまです。今日、医学の日々の進歩によって刻々と状況が変わってきています。正しい知識を得ることは感染予防には不可欠ですが、同時に、HIV/AIDS に関するスティグマを低減していくこともまた不可欠です。この出来事があってから、「偏見を低減すると同時にこれ以上の感染を予防する教育とは？」「これ以上の犠牲者責めが起きないようにするためには必要なこととは？」という問題意識をもつようになりました。

● 実践から研究へ：博士後期課程入学

博士後期課程在学中は、大学生を対象としたさまざまな調査をさせていただきました。予備的な調査によると、HIV 感染経路に関する知識が高かったとしても偏見が強いこともあることが判明しました（飯田・いとう・井上, 2010）。このことから感染予防と偏見予防のどちらにも資する知識として、狭義の意味での知識だけでなく、HIV 陽性者のことや心理社会的背景を知ることが大切であるといえます。そもそも、HIV に感染すること自体、どのような心理社会的な意味があるものとしてわれわれに認識されているのでしょうか。Babaloa（2007）は、社会が HIV 陽性者へ示す否定的な評価を、人々が強く知覚することが、HIV 抗体検査の受検やカウンセリング（以下、エイズ相談）を利用しようとする意図を低減させることを見出しました。偏見や死の恐怖は、人々が形成する集団心理ともいえます。すなわち、疾患に対する否定的認知がエイズ相談の利用を阻害することを示しました。清水ら（2005）は、大学生の職業選択行動に関する研究において、就業後に自己が置かれる状況や周囲から受けるであろう影響を就業後に予期したイメージを“就業自己イメージ”と命名し概念化を試みています。人がエイズ相談を選択する際も、感染判明後の自己の生活ぶりや自己の姿を思い描き、感染に伴い自己が周囲の環境からどのような影響を受けるかを予想する過程で行動意図が低くなることは容易に予想されます。われわれは、こうした問題意識のもと、大学生を対象に HIV 感染想定時の自己の変容に対するイメージをどのように認識しているかを明らかにするための調査を行いました。結果、①社会からの隔絶、②身体的脆弱性、③生活態度変容、④親密性の因子が見出されました（飯田・伊藤・井上, 2009）。今後、実際の相談行動との関連を検討する予定ですが、こうした調査によって得られた尺度は、コミュニティ規模での予防啓発の際、プログラムの計画、実施、評価の過程において実用的なツールとして必要不可欠であると考えられます。現在、スティグマ低減や予防啓発に関わる研究をしています。今後も、上述した社会問題に対して具体的な解決に資するよう取り組んでいきたいと考えております。

Babaloa, S.（2007）Readiness for HIV testing among young people in Northern Nigeria: The roles of social norm and perceived stigma. AIDS Behavior, 11, 759-768.

飯田敏晴・伊藤武彦・井上孝代（2009）「想像されたヒト免疫不全ウィルス感染後の自己イメージ尺度の作成」日本応用心理学会第76回大会発表論文集, 57.

飯田敏晴・いとうたけひこ・井上孝代（2010）「日本の大学生におけるHIV感染経路に関する知識と偏見との関連：性差に焦点をあてて」応用心理学研究 35, 81-89.

清水裕・下斗米淳・風間文明（2005）「大学生の就業自己イメージ尺度作成の試み」社会心理学研究 20, 191-200

同志社大学大学院文学研究科
心理学専攻

渡邊ひとみ

むかしからの疑問

私は小さい頃から戦争や難民問題、人種差別問題、宗教間の紛争などに興味をもっていました。テレビや雑誌などに映された恐ろしい映像をみるたびに、「何が人々のこころをひとつにし、何が人々のこころを隔ててしまうのだろう」という疑問を抱いたのを覚えています。そして、大学2回生のときに起きた米国での同時多発テロやその後の戦争が、再び同じような疑問を生じさせました。

アイデンティティに興味をもったわけ

大学4回生時に、交換留学生としてカリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California, Los Angeles）で学ぶ機会がありました。UCLA で開講されている心理学の授業数は驚くほど多く、一般的な講義から専門性の高い授業まで幅広いというのが特徴です。また、大教室での授業であったとしても、教授が隈なく教室中を歩きまわり、気さくに生徒とのディスカッションに応じてくれます。さらに、自閉症に関する授業であれば、実際に自閉症のお子さんを教室に呼び、セラピーの状況を実演するなど、テキストだけに頼らない授業もたくさんありました。他国の学生とのディスカッションはもっとも刺激的で、多様な意見を聞くことで、普段は疑問に思わない事柄に関しても改めて考える機会を得ることができ、より広い視野から物事を捉える姿勢も身につけることができました。

しかし、一歩街に出ると、日本では経験したことのない状況にたびたび遭遇しました。「アジア人である」もしくは「日本人である」ということが原因で生じる対人問題です。アジア人であるために差別をされたり、お店では無視をされたりといったこともありました。このような経験をするたびに「日本人としての自分とは何だろう？」「アジア人としての自分とは何だろう？」と考えるようになりました。まさに、アイデンティティ問題に直面したわけです。

そんな折、UCLA での講演会を聴きに行く機会がありました。哲学者や教育者、宗教学者等が集い「どのように世界平和への道を築いていくべきか」というテーマで議論するというものでした。そこでは、「21 世紀においては、戦争という概念自体がもはや時代遅れだ」という点と、「平和のための活動や政策は非常に重要ではあるが、真の平和が築かれるのは世界中の人々が政策などの外的なものではなく“自己”に目を向けるようになったときだ」という2点が一致した見解として主張されていました。この講演を聴き、自分が日常生活のなかで直面している問題と、長年疑問に思っていたことへの答えは“セルフ（self）”や“アイデンティティ”といった自身の中核となる部分に隠れているのではないか思うようになりました。これがアイデンティティに興味をもったきっかけです。

私の研究内容

以前はアイデンティティの文化比較研究を行っていましたが、現在は勤労女性の仕事とのかかわり方をアイデンティティの視点から検討していま

わたなべ・ひとみ◉群馬県生まれ。2005年、同志社大学文学部卒業（2003～2004年は交換留学生としてUCLAで学ぶ）。2008年、同志社大学大学院文学研究科博士前期課程修了。現在は同研究科の博士後期課程に在学中。多様化する女性の仕事とのかかわり方を検討するため、成人女性を対象に、ライフコース選択とアイデンティティとの関連を研究している。

す。わが国の女性が選択し得るライフコースとしては、主に以下の3つのコースが挙げられます[1]。(1) 出産後も仕事を続ける「就業継続コース」、(2) 出産を機に仕事から離れ、育児がひと段落してから仕事に戻る「再就業コース」、そして（3）出産を機に退職する「退職コース」の3つのライフコースです。私は、異なるライフコース選択とアイデンティティとの関連を、“結婚”や“出産”といったライフイベントも含めながら包括的に検討しています。

アイデンティティというと、まずマーシャの地位理論（identity status model）を思い出す方が多くいるのではないでしょうか。もっとも広く用いられてきたこの地位理論は、傾倒（commitment）の程度と危機（crisis）の有無からアイデンティティの状態を4つのカテゴリ（「アイデンティティ拡散」「早期完了」「モラトリアム」「アイデンティティ達成」）に分類するモデルです。

この地位理論以外にも、レヴィンソンの生涯発達的視点などさまざまな研究的立場がありますが、私自身は生活領域（context）という概念を取り入れたアイデンティティ研究を行っています。生活領域とは、私たちが日常的に参加している状況領域であり、「職場」「家庭」「習い事（英会話教室など）」「ボランティア活動」などのことです。私たちはさまざまな生活領域に参加し、その領域に特有のアイデンティティを形成しています。この生活領域に特有のアイデンティティは、生活領域という枠にとらわれない個全体としてのアイデンティティに影響しており、図1のように統合されていると仮定されます[2]。母親アイデンティティなどの役割に特化したアイデンティティではなく、生活領域特有のアイデンティティを検討することで、日常生活により即した観点からその個人を捉えることが可能になります。また、アイデンティティの“構造”に関してはほとんど研究がされてこなかったため、構造的な視点を取り入れることにより、アイデンティティ研究に新しい方向性を示すことができるのではないかと考えています。

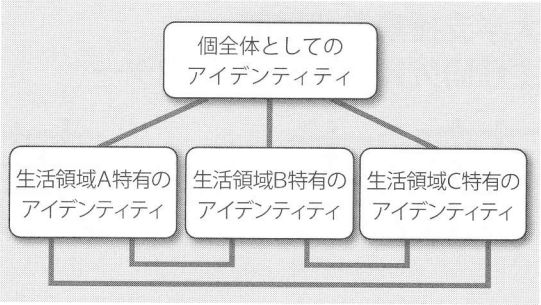


図1　生活領域を取り入れたアイデンティティ構造

これまでの研究から、アイデンティティと生活領域の重要性とが複雑に関連し合いながらライフコース選択の違いに影響を与えていることが明らかとなりました。たとえば、職場領域に関しては、職場をどれほど重視しているかに関係なく、アイデンティティの対人行動側面が高いほど「就業継続」を選択します。ところが家庭領域になると、家庭を重視していない場合にのみ、アイデンティティの対人行動側面が高いほど「就業継続」を選択するというように、ライフコース選択に影響する要因間の関係性が職場領域とは異なるのです。さらに、同じ就業継続型女性であっても、子どもがいるかどうかによってアイデンティティの統合のされ方が異なるといった興味深い結果も得られています。

今後の課題

女性のライフコース選択は、経済的要因や育児休業制度を含むサポートの有無など、さまざまな要因が影響しています。そのなかで、「いかにしてアイデンティティ要因を他の要因と関連づけ、女性の仕事とのかかわり方に関連する諸問題を解決していくか」が今後の課題であると感じます。難しい問題ではありますが、日々研究を積み重ね、少しでも社会に役立てていけたらと思います。

1 内閣府（2006）「国民生活白書」社団法人時事画報社
2 van Hoof, A., & Raaijmakers, Q. A. W.（2002）The spatial integration of adolescent identity: Its relation to age, education and subjective well-being. Scandinavian Journal of Psychology, 43, 201-212.

株式会社ベネッセコーポレーション
大学支援事業開発部
主任研究員・商品ディレクター

藤浦（加藤）芳江

学校・家庭から社会に出る支援を

2004年より今の仕事を担当し、多くの大学生、先生方や職員の方とお会いするようになりました。そこで学問的背景も身につけたいと考え、2006年4月に仕事との両立が可能な放送大学教養学部に編入し、卒業後、2008年4月に放送大学大学院文化科学研究科に入学しました。大学院での研究テーマは「大学生の社会移行不安とその支援方法に関する研究」でした。仕事は旧姓の藤浦で行っていますが、大学は戸籍姓の加藤で在籍していたので、今回は藤浦（加藤）で書かせていただいています。

「大学生の社会移行不安に関する研究」の概要

現代の大学生は、社会への移行に対してさまざまな不安や悩みを抱えています。そのうえ、2008年秋以降の世界的不況の影響を受けて雇用状況はますます厳しくなっており、大学生の社会移行に対する不安は高まりつつあるといえます。大学現場でのキャリア形成支援は常に進化を続けていますが、学生が抱えている不安にそれほど着目することなく、情報提供やスキル中心の支援が行われることも少なくありません。そこで、本研究では大学生が社会への移行に関してどのような不安を抱いているのかの実態把握を行い、それを踏まえた支援のあり方および支援者に求められる資質・能力の提言を目的としました。

このために【調査1：大学生の社会移行不安に関する質問紙調査】を5大学867名に対して、【調査2：大学生への面接調査】を4大学19名に対して、【調査3：キャリア形成支援者への面接調査】を4名に対して行い、【仮説1：「社会移行への不安」は大学・学年・学部系統によって傾向の違いがあるのではないか】【仮説2：「社会移行への不安」に対して、大学への入学理由や現在の大学生活に対する気持ちは影響を与えているのではないか】に対する検証を行いました。その結果、「社会移行への不安」は大学・学年・学部系統にはそれほど関係なく、大学への入学理由や現在の大学生活に対する気持ちと関係があることがわかりました。また、程度の差はあるにせよ自分なりに将来の進路イメージを持っている学生が多く、「何も考えていない」学生は少数という実態でした。

調査結果より

誌面の都合上、調査1の全体集計結果を少しだけご紹介したいと思います。大学入学理由は、学部系統による違いが大きく、理工学系統や人文科学系統は「大学でやりたいこと」を、社会科学系統はその先の「社会に出てから」「就職」を重視している傾向がありました。また、現在の大学生活に影響を及ぼす要因は「人間関係」が第一位、続いて「学業面」「進路面」となりましたが、学年が上がるにつれて変化します。大学卒業後の進路を考えたときの気持ちとしては、「今のところ不安はない」は5.6％しかおらず、ほとんどの大学生が何らかの不安を抱えていることがわかりました。その内容（複数回答可）は、「自分の希望する進路にきちんと進めるか不安だ」48.9％、「自分にあった将来の進路を決められるかどうか不安だ」

ふじうら（かとう）・よしえ◉1966年東京都生まれ。1988年上智大学理工学部電気・電子工学科を卒業後、㈱ベネッセコーポレーション（当時は福武書店）に入社。「進研ゼミ小学講座」にて教材編集・開発を担当後、「進研ゼミ高校講座」にて高校生の進路選択支援に携わる。2004年より大学現場においてキャリア形成支援を行う一方、支援者養成、教材開発、大学の教育支援なども行っている。並行して2006年に放送大学教養学部発達と教育コースに編入、2008年に卒業し、2010年放送大学大学院文化科学研究科教育開発プログラム修了。CMCA認定キャリアカウンセラー、2級キャリアコンサルティング技能士。

47.8％、「将来の進路について何を考えればよいかわからなくて不安だ」22.1％、「進路について何も考えていないので不安だ」6.9％となりました。

支援のあり方および支援者に求められる能力・資質について

最後に、調査3より支援者に求められる資質・能力として抽出されたものに加えて、先行研究及び調査分析段階で支援すべき観点等を整理した10点を挙げさせていただきます。

①相手を学生と思わずに同じ立場で関わり、ひとりの人間として彼らが自分で結論を出せると信じること。

②人間性が大事。支援者自身が常に学び、努力をし、キャリアを積んでいること。

③観察力と洞察力が大事。状況に応じて必要な情報や訓練、視点を我慢強く個人やマスに提供していくこと。

④支援者自身がモデルであるべき。現実の生々しい人間として、長所を活かしながら今仕事をしていることをみせること。

⑤学生に提供できる情報や知識、そして限られた時間内で簡潔にわかりやすく伝えられる授業展開力をもっていること。

⑥その仕事に就くためのプロセスだけでなく、志望職業が本当に適切か、就職後の働くイメージ、結婚生活を含めたライフコース全体についてモデルを得て検討するといった長期的な視点を与えること。

⑦就職活動時に困難をきたす可能性の高い対人志向や自己効力感の低い学生を早期に発見し、長期的に粘り強く支援していくことによって社会移行の力を高めていくこと。

⑧主体性の乏しい学生でも吸収しやすいような形で、テレビや本、具体的な事例、データなどのさまざまな刺激を紹介し、行動に移すようしむけること。

⑨ただ目標設定をさせるだけでなく、その具現化のために実際に何をなすべきか、という遂行についての理解とそれに伴う行動のあり方への具体的な支援をすること。また、希望が叶わない場合のフォローも心掛けること。

⑩大学で学ぶことと社会とのつながりを実感できない学生に対して、学生の腑に落ちるように伝えること。

溝上（2008）は、将来の見通しの実現に対して理解・実行できている者のほうが主体的に勉強できており、単に「大学で勉強する」ことが重要なのではなく、自らの将来、成長に向けて何が自分にとって重要であるかをいろいろ意味づけながら勉強することが重要なのだと指摘しています。学生にとっては、将来も大事だが日常も大事であり、双方を直線的につなげれば効率的だがうまくつながらず、行動もなかなかつながらない、というジレンマに陥っているように思われます。

キャリア形成科目では多くの情報を提供しながら、自分の長所・興味関心・価値観などを考え、また結婚や家庭、社会保障なども視野に入れつつ、仕事や大学での学びおよび課外活動により大学生活をどう過ごすのかの計画を主体的に立て、実行を促すことがよく行われます。大学生はその計画および実行段階において自分の弱さや社会の厳しさ、世の中や将来の動向が見えない不安に向き合いながら、自分自身の思考や行動を変え、成長していきます。社会や制度上の問題を是正していくこともちろん重要ですが、それと並行して個人としても不安を抱えているだけでなく、現実をみつめ、自分を磨いて努力する必要があります。これは自分を含めた社会人も同様であり、一生続くものです。出会った学生に対し、そのプロセスで個人に合った支援をしていくのがキャリア形成支援者の役割であり、支援者自身も成長を続けていくことが学生に対して説得力を増すことになると思います。私も遅い歩みではありますが、これからも自分なりに少しずつ前に進んでいきたいと考えています。

加藤芳江（2010）「大学生の社会移行不安とその支援方法に関する研究」放送大学大学院修士論文

溝上慎一（2008）「大学生のキャリア意識調査2007調査報告書」京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会

医療現場とリスクマネジメント
～看護師をむしばむ医療事故への不安～

九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野
原田博子　川本利恵子

看護師たちが離職を選ぶ本当の理由は？

近年、看護職の離職が危機的な問題として注目されている。2007年度の46,342名の新卒看護職員の内、9.2％が1年以内に離職している。人数にすれば4,264名であるが、看護師学校養成所（定員30名）の143校分に相当する。新人以外の常勤看護職員の離職率も、12.6％という結果である。

離職の背景に医療事故への不安があると指摘されている。実態調査[1]によれば、看護職の全体の61.6％が「医療事故を起こさないか不安」と回答、24歳未満では81.1％、29歳未満では70.9％と年齢が低いほど著明である。一方で、仕事を続けていく上の悩み上位4位のなかに「配置部署の専門的な知識・技術が不足している」「基本的な技術が身についていない」「事故報告書を書くこと」という悩みがあがっていたことも注目すべきである。他調査結果[2]でも、看護職の退職理由のうち、表向きは他病院へ勤務という退職理由が第1位であったが、その本当の理由は「医療事故や責任の重さへの不安」であったと回答している人が多数いた。

ところで、看護職が関与した医療事故報道の結果[3]では、その事故の多くが医学的処置・管理であるが、看護師独自の業務である日常生活の援助に関する事故も毎年10件程度報道されている（図1）。他機関の調査[4]でも、病院における医療事故の報告件数は、毎年増加している（図2）。安全管理の視点では、多くの事故報告書が出されるほど、今後の事故を未然に防ぐことができるとされている。事故は知識・技術の未熟さにあるとされており、結果的に看護師にとって事故報告書を提出することが大きな負担となっているという現状がある。たとえ事故を予防するために提出している事故報告書であっても、看護職の不安を増強させることになっていることは課題といえる。

医療事故問題での応用心理学への期待

医療事故のなかには、1人の看護師だけのミスが原因だと考えられる事故もある。しかし、単純に当事者だけが原因と決めつけられない事例もある。たとえば、セラチア菌による院内感染による7名の患者死亡事故[5]の原因は、点滴の留置針が患者の身体に長時間刺さったままで細菌にさらされやすい状態であった。この事故の場合、看護師に責任を求められているが、看護師たちは院内感染のガイドラインの存在すら知らされておらず、その病院の慣習で処置を行っていたことに基づく事故と考えられる。

次に、人工呼吸器で使用する蒸留水の薬品ラベルをみずに、エタノールを誤注入した死亡事故を振り返ってみよう。京都地裁一審判決では、看護師本人たちが薬品ラベル確認という基本的注意義務を怠ったと業務上過失致死罪という判定が行われた。その後、大阪高裁控訴審判決では、控訴は棄却されたが、弁護士側が主張した、看護師の業務量の多さと指導体制や教育体制が不十分さの

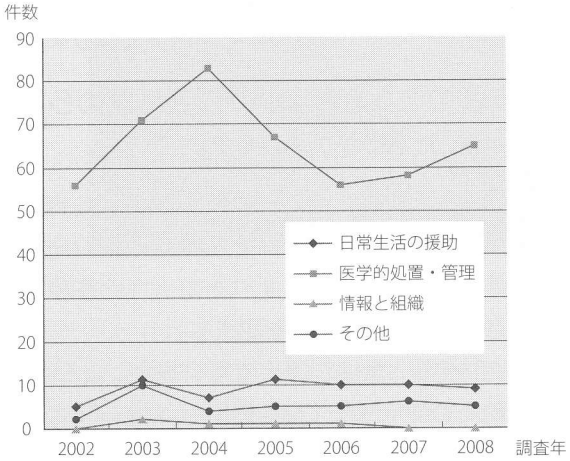


図1　看護職が関与した医療事故報道

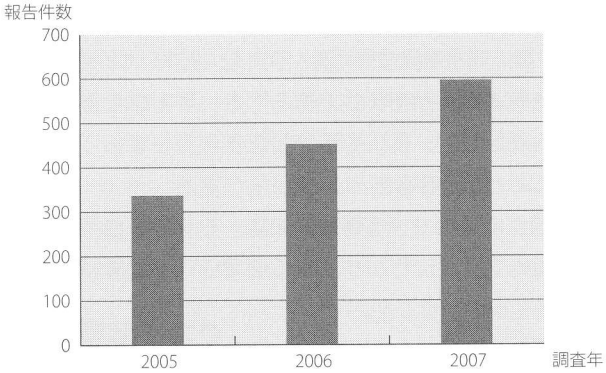


図2　医療事故報告件数

原田博子（はらだ・ひろこ）◉山口県生まれ。2010年より九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野准教授。また、日本看護協会「看護職のワーク・ライフ・バランス実現に向けた事業」の推進プロジェクト委員として活動している。1972年順正短期大学保健学科卒。離島の養護教諭を経たのち、看護師長として働きながら慶應義塾大学文学部哲学科卒。山口大学大学院経済研究科修士課程修了。山口大学大学院医学研究科博士課程修了。2009年末まで萩市民病院看護部長。

川本利恵子（かわもと・りえこ）◉山口県生まれ。日本応用心理学会常任理事および機関紙編集委員長。九州大学大学院医学研究院保健学部門看護学分野教授。1981年中京大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程修了。山口大学大学院医学研究科博士課程修了。早くから看護教育に携わり、産業医科大学産業保健学部の教授を経て現職。看護と心理の学際的発展を目指している。

ため、看護師たちは多忙な業務で身体的・精神的疲労が蓄積し、ストレスが大きかった状況であることと、薬品の類似と保管の問題があり、取り違えが起きやすい状況であったことは認められた。病院や看護単位での管理が、不十分であったといえる。

さらにもう1つ、立位による浣腸実施により直腸穿孔を引き起こした4件の事故報告である。浣腸は左側臥位で行わなければならないが、患者から「トイレまでの間に便が漏れるのではないか心配」「トイレが開いていないと困る」などの訴えに応じ、看護師はトイレ内において立位前傾体位で浣腸実施し、その結果直腸穿孔を引き起こしている。筆者も同様な体験がある。温罨法（おんあんぽう）の看護技術演習時、学生に「私は、湯たんぽが熱くなると足から離すことができるから、足に湯たんぽをくっつけておいてほしい」というと「はい」と素直に足の上に載せてしまった。湯たんぽは、通常患者の皮膚に接触しないように使う。なぜならば、湯たんぽを身体より離して使用しなければ、高齢者や糖尿病罹患患者、意識障害や麻痺がある患者などでは熱傷が発生するという危険性があるからである。看護師は、患者の訴えに応じることが必要である。しかし、患者の要望通りなら何でも行ってよいかどうかの判断力も必要である。患者の要求通りにできない場合、相手に納得してもらえるように説明できることが求められるし、そのような看護師を育成することが重要である。

このように事故発生の陰には事故防止のためのマニュアルが徹底されていなかった、労務管理の不十分による注意義務ができなかった、相手の要求に応じるだけの状況判断力の乏しい人材育成が、問題の根本原因として横たわっている。ここに、ヒューマンエラーをどのように安全のためにバックアップするかという視点や若い看護師の事故への不安が、キャリア発達を阻害しているかという要因を取り除くために、産業心理学、職業心理学の知識を活用する必要があると考えている。

また、看護師の提出する事故報告書の記載をみると十分な分析をする前に、「私が今後気をつけます」という無用な責任の引き取り方や感情的にとらえている文面を多く見受けるが、これは自己否定につながりやすく、自信喪失の原因となる。この点においても現在の医療の高度化・複雑化がすすむなか、看護師たちが事故への漠然とした不安を抱えながら働いている状況を解決するための、やはり心理学の知識の活用が重要である。

事故を当事者やその病院のことだと他人事のようにとらえるのは、とても危険なことである。筆者も看護管理者としてさまざまな医療事故報道を目にするたびに、病院の管理職は看護師たちを事故の当事者とさせないための対策をとっていたのだろうかと疑問に感じている。

調査のなかで、看護師としてうれしかったこととして、「患者さんから喜ばれた」ということがあがっている。一生懸命看護したいと希望をもって就職した若い看護師たちが、漠然とした「医療事故を起こさないか」という悩みを抱え、さらにそれが理由で離職してしまわない教育体制や職場作りが重要である。日本看護協会は、「看護職確保定着推進事業」の一環として、3カ年計画で働き続けられる職場作りの全事業に取り組んでいるが、筆者もその一委員として活動を行っている。ぜひ応用心理学領域の皆様にも医療事故の背景に隠れている問題に関心をもっていただき、ご支援をお願いしたい。

◉参考文献

1）社団法人日本看護協会広報部：「2009年看護職員実態調査」「2009年病院における看護職員需給状況調査から見る看護の現状と課題」News Release、2010年3月16日
2）山口県健康福祉部医務保健課：山口県における看護の現状 2010年3月
3）社団法人日本看護協会医療・看護安全対策室：安全情報「看護者が関与した医療事故報告」、2002年～2008年
4）財団法人日本医療機能評価機構　医療事故防止事業部：医療事故情報収集等事業報告
5）社団法人日本看護協会医療・看護安全対策室：緊急安全情報. 2004-2010

大学探訪

研究室におじゃましました

応用心理学の教育を考える
常磐大学人間科学部

申 紅仙（常磐大学人間科学部准教授）

安全・防災に取り組んでいます

申研究室は、安全心理学、産業・組織心理学、人間工学を扱っています。主な研究テーマは自然災害時の情報提供と共有方法、緊急時の退避行動、ヒューマンエラーと事故防止対策などで、最近はもっぱら自然災害に関わる情報共有のあり方や、ヒヤリ・ハットマップによる情報提供、災害時の避難などを研究しています。また、ゼミ生は現在３年生９名、４年生５名の14名で、一緒に楽しく研究を進めております。

▌アメとムチのある教室――最近の教育方針

申ゼミでは、普段から社会人としての基本姿勢や常識を必要以上に重視しています。なぜなら学生を伴って災害現場に出向いたときに、被災によって辛い思いをされている方々に失礼があっては大変だからです。実はここ数年、私自身の常識と学生の常識の間にかなりのギャップがあるように感じています。教員に対する距離感や言葉遣いなど、他大学の非常勤でも感じることがありますので、わが校特有の問題ではないようです。そのようなわけで、ゼミ生には社会人として必要な礼儀や常識、質問やメール文書の掟（？）などを指導していますが、これらは彼らが卒業した後に必ず役立つものと信じています。

本来の研究指導も学生にとっては辛いようです。春セメスターにヒューマンエラーや事故に関する本を２～３冊輪読しているですが、ゼミ生のスキル向上のために、最初の１冊は全員が毎週レジュメを作成することになっています。毎週課されるレジュメを通して、ゼミ生は論文や資料の読み込み方や要約の仕方をブラッシュアップしていきます。また本読みと平行して新聞や雑誌に掲載される事故記事を毎週取り上げ、各々が持ち寄った事故について原因と対策を話し合っています。現在はこの他に、机、椅子、ドア、廊下などさまざまなモノのサイズを測り、使い勝手の評価を教室の内外で行うこともあります。課されるものも多く、ゼミ生にはかなりきついようですが、よい経験になっているようです。また、ありがたいことに４年生も授業に参加し、時間外には陰で３年生を指導してくれています。

ここまで記述すると、ただ厳しいだけのようにも思えますが、授業中は机の真ん中にゼミ生が持ち寄った数種類のお菓子が並び、お菓子を食べながら和気藹々と進められています（写真1）。定期的に飲み会や合宿もあり、３年・４年の隔てのない仲の良い雰囲気でやっております。またこれまでに複数

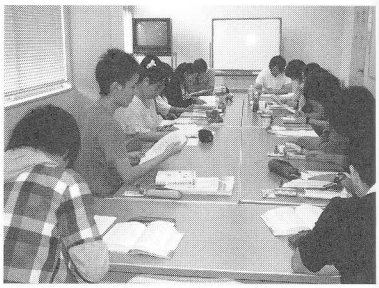


写真1　ゼミ授業風景
お菓子を食べながら…

写真2　研究所見学（（独）防災科学技術研究所　大型降雨実験施設、大型耐震実験施設などを見学）

申 紅仙（しん・ほんそん）◉常磐大学人間科学部心理学科准教授。2000年立教大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程修了、博士（心理学）。立教大学非常勤講師、（独）防災科学技術研究所特別研究員等を経て2004年常磐大学専任講師、2009年より現職。専門領域は安全心理学、産業・組織心理学、人間工学。これまで自然災害を含めた緊急時の避難行動、災害情報の共有システムなどの研究に携わってきた。

の研究所と大学、施設の見学を行い、事故現場などへも行きますので、アメとムチ、メリハリの利いたゼミではないかと自負しています（写真2）。

ゼミ＋α有志企画「常磐♡愛プロジェクト」（勝手に）進行中

申研究室では、フィールドを重視した研究調査を行っていますが、大学生をいきなり事故現場や災害現場に送り出すことは無理があります。そこでフィールド対象を最も身近な大学とし、調査することにしています。これは、ゼミ生や3年次のグループ別実験実習メンバーが中心となり始めたものでして、実験実習の休憩中にでた話題がきっかけでした。大学の教室やドアなどのデザインに対して不便さを感じているという話題だったのです。そこで、不満があるなら具体的にどれくらい不便なのか、またどのようにすればよくなるのか、といったことまで自分たちで取り組んでみてはどうかとなり、母校への愛着にもつながるよう「常磐♡愛プロジェクト」と勝手に命名し、興味の赴くままにマイペースで取り組むことになりました。念のため、お断りしておきますが、大学構内の不便なデザインはわが校に限定される問題ではないと思っています。私自身、これまで複数の大学で迷ったり閉じ込められたりした経験がありますので。

ただ、常磐大学は、改善を急ぎたい事情があります。わが校には大学構内に幼稚園があり、校内では園児やそのきょうだいである乳幼児の姿をよくみかけます。しかしながら大学構内の施設は彼らの安全を考慮してデザインされているものではありません。園児が実際にヒヤッとする状況に陥っている場面もしばしばみかけます。そこで校内を対象にした乳幼児ヒヤリ・ハット調査やヒヤリ・ハットマップを作成し、結果を保護者の方と大学施設課へフィードバックしました。現在は、学生たちの喫煙場所を含めた安全意識向上のための問題を考えたり、そのほかに「大学ホームページデザイン（視線分析）」、「大学構内ヒヤリ・ハットマップ」、「ドアデザイン」などにも取り組んだりしています。これらの企画は、卒業研究とする学生もいるため、4年生が中心となっていますが、就職活動と授業の合間を利用して校内を練り歩いているようです。

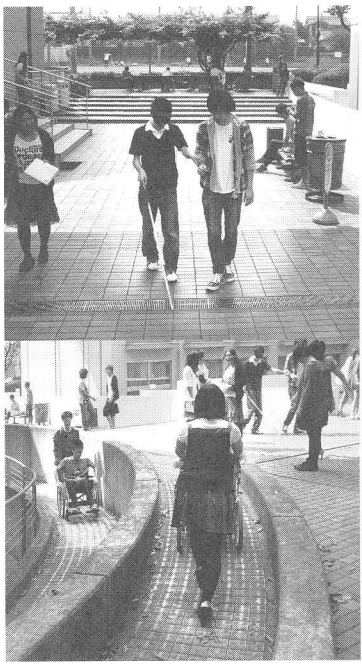


写真3 大学構内アクセシビリティ評価（「常磐♡愛プロジェクト」メンバーの自発的な行動から始まったもの。この他、ドアの使い勝手を評価するために校内を練り歩く学生もいる。）

人間工学や安全に関する問題を扱う研究室としては、是非「KAIZEN」が伴うような成果がほしいところですが、それはまだ少し先のようです。しかし、このような経験を通して母校への愛情を深めてくれればと思っています。自発的な発言や行動をとる彼らは、頼もしい限りです（写真3）。

常磐大学人間科学部心理学科

基礎・応用領域を広くカバー

常磐大学人間科学部心理学科について紹介させていただきます。当学科の現在の定員は一学

年90名程度です。基礎・応用心理学領域には、伊田政司教授（計量心理学、応用実験心理学）、森山哲美教授（行動分析学、学習心理学、比較心理学）、伊東昌子教授（認知心理学、環境情報心理学、熟達科学、ユーザ工学）、申の4名の教員が所属し、カウンセリング領域には渡邉孝憲教授（臨床心理学、人格心理学）、濱崎武子教授（臨床心理学）、秋山邦久准教授（臨床心理学）、島田茂樹准教授（教育臨床学、行動分析学）、馬場久美子准教授（臨床心理学、異常心理学、家族心理学）、永野勇二専任講師（臨床心理学）、菅佐原洋助教（発達障害児臨床、応用行動分析、脳機能研究）の7名、心理学準備室1名の12名体制で学生指導にあたっています。各教員の研究領域をみてもおわかりのように、本学科でカバーされる研究領域は、知覚、計量、学習などの基礎領域から、環境、産業・組織、臨床などの応用分野まで幅広い領域をカバーしています。また、本学大学院人間科学研究科修士課程（第3領域）は、臨床心理士指定大学院第1種校に認定されています。

▌きめ細かい指導カリキュラムと充実した環境

授業カリキュラムの特徴として、1年次から心理学を学ぶ機会が比較的多く用意されていることが挙げられます。たとえば1年次の「基礎ゼミナール」では、ノートテイキングや文献検索、レポート作成などの受講スキルだけではなく、心理学科各教員から各研究領域を紹介してもらう機会が設けられています。受講生は、このような機会を通して専門科目を履修する前に各領域をイメージすることができます。また「心理学史」、「心理学概論」、「カウンセリングの歴史」なども1年次から受講することができます。

もう1つの特徴としては実験・実習が挙げられます。心理学科の実験・実習といえば、心理学科学生なら避けて通れない科目であり、数々の実験と検査とレポート作成をこなす2年次の通年科目が一般的かと思います。わが基礎・応用心理学領域では、3年次にもさらなる実験実習が用意されています。特に3年次の秋セメスターには、テーマごとに分かれて実験または調査を行います。実験内容、刺激、教示文、実験参加者への協力願いにいたるまで全て学生たちがこなすことを求められるため、学生たちはかなり辛い状況に陥ります。この結果は、最終週にグループごとに発表会で報告しあうのですが、教員としても、真摯に取り組んでいる姿に学生たちの成長を感じられるため、指導が大変ですが楽しみにしている部分もあります。また、カウンセリング領域では、パーソナリティ・アセスメントやカウンセリング特講などが用意され、カウンセリング・スキルを向上させています。こうした特色あるカリキュラムは、卒業研究に向けての実力向上に大いに寄与しています。

次に実験設備ですが、本学科には動物実験棟があり、ハトの飼育と実験を行っています。飼育には学生が中心となり動物達の健康・衛生管理を行っていますし、行動観察やシェイピングなど、心理学科ならではの研究に取り組んでいます。またそのほかの実験装置には、非接触型アイカメラ、GSR、騒音計、照度計などの計測器も備わっており、研究や学生指導に役立てています。

このように常磐大学人間科学部心理学科は、規模は大きくないかもしれませんが、学生達の自主性を重んじ、きめ細かい指導を心がけております。お近くにお越しのおりには是非、研究室に遊びにいらしてください（写真4）。

写真4　2010年度申ゼミ（個性溢れるメンバーばかりです。ぜひ遊びに来てください。お菓子を準備してお待ちしております。）［常磐大学人間科学部ゼミ紹介誌『SOS（セミナーオブセミナー）』より］

職場探訪

犯罪科学に関する総合的な研究に取り組む
科学警察研究所

関 陽子（科学警察研究所法科学第四部付主任研究官）

ようこそ、科学警察研究所へ

科学警察研究所は警察庁の附属機関で、犯罪科学に関する総合的な研究を行っている研究所である。

所在は千葉県柏市、つくばエクスプレスの柏の葉キャンパス駅が最寄り駅である。周辺は、駅名のとおり、学術や産業振興のための施設が多く存在しているエリアである。

ところで、皆様は「科学警察研究所と聞いて何か思いつくことをあげてください」といわれたらどのようにお答えになるだろうか。「DNA型鑑定」や「サリン事件」とお答えになる方が多いのではないだろうか。もしかしたら「応用心理学会の広報誌に登場するぐらいだから心理学の研究もやっているのだろう」と思われる方もいらっしゃるかもしれない。なかには「そう言われてみればポリグラフ検査って聞いたことがある」とお思いの方もいらっしゃるだろう。科学警察研究所では、DNA型鑑定や毒物鑑定、ポリグラフ検査に関する研究ももちろん行われているが、このほかにも多様な研究が行われている。実際、約100名の研究員のバックグラウンドは、心理学のほかに、生物学、医学、理学、化学、薬学、物理学、農学、工学、社会学、教育学など広範囲にわたっている。単一の研究所でこれだけ多彩な研究者が研究を行っているところは、あまりないのではないだろうか。

本稿では、科学警察研究所の活動をご紹介するものであるが、このような多様な研究活動を詳細にご紹介するのは難しいため、ごく簡単なご紹介になることをお許しいただきたい。なお、詳細および最近の成果等は、

http://www.npa.go.jp/nrips/jp/index.html

をご参照いただきたい。

科学警察研究所の沿革

科学警察研究所は、1948年に国家地方警察本部刑事部鑑識課に科学捜査研究所が設置されたことにより、その歴史をスタートさせた。

以下に、科学警察研究所の沿革を年表に示す。

1948年　国家地方警察本部刑事部鑑識課に科学捜査研究所が設置される。
1949年　千代田区霞ヶ関から千代田区三番町に移転。
1952年　国家地方警察本部刑事部の附属機関となる。
1954年　警察法の改正により、警察庁の附属機関となる。
1959年　科学警察研究所と改称し、防犯少年部および交通部を設置する。
1970年　犯罪捜査部を改組し、法科学第一部、法科学第二部を設置する。
1971年　附属鑑定所を設置する。
1983年　法科学研修所を設置する。
1996年　法科学第三部を設置する。
1999年　千葉県柏市柏の葉に移転する。
2003年　法科学第四部を設置する。防犯少年部を犯罪行動科学部に改称する。
2005年　交通部を交通科学部に改称する。

科学警察研究所の活動

警察法第28条には、科学警察研究所は、「科

関 陽子（せき・ようこ）◉ 1985年に科学警察研究所に入所し、法科学第一部文書研究室に配属される。1999年に文書研究室長となる。2003年に内部の組織改変により文書研究室の業務が法科学第四部情報科学第二研究室に移行されたことに伴い、法科学第四部情報科学第二研究室長となる。2008年法科学第四部付主任研究官となり、現在に至る。人間の熟練した技術の数量化に興味をもっている。

学捜査についての研究および実験並びにこれらを応用する鑑定および検査に関すること、少年の非行防止その他犯罪の防止についての研究および実験に関すること、交通事故の防止その他交通警察についての研究および実験に関すること」の3つの事務を行うと定められている。

科学警察研究所は犯罪捜査のニュースなどによく登場するので、科学警察研究所は犯罪捜査に関する研究や鑑定だけを行っているところという印象をもたれるかもしれないが、警察法のさだめのとおり、犯罪捜査に関する研究や鑑定のほか、犯罪や事故の防止のための研究や実験も科学警察研究所の業務であり、その意味で、科学警察研究所は犯罪科学に関する総合的な研究所であるといえる。また、上記の所掌事務に関連して、各都道府県の科学捜査研究所の鑑定技術職員を対象とした研修や指導も行っており、鑑定技術の高度化およびその普及にも力を入れている。

▌研究部および附属鑑定所の活動

科学警察研究所では、研究、鑑定、研修の活動は、主に6つの研究部（法科学第一部、法科学第二部、法科学第三部、法科学第四部、犯罪行動科学部、交通科学部）と附属鑑定所が行っている。本稿では、6つの研究部と附属鑑定所の概要をご紹介することにより、科学警察研究所の活動のあらましをご紹介する。

法科学第一部では、犯罪の捜査に関連する生物学の研究や実験、鑑定・検査を行っている。具体的には、毛髪や皮膚片などの個人識別法、骨や歯などの個人識別法、防犯カメラ等で撮影された顔画像の個人識別法、血痕や体液斑の証明、血液型による個人識別法、DNA型分析による個人識別法、バイオテロや生物剤を用いた犯罪に対応するための検知法などに関する研究開発と、これらを応用した鑑定・検査である。

法科学第二部では、犯罪の捜査に関連する物理学および工学の研究や実験、鑑定・検査を行っている。具体的には、ビデオ画像などを用いた画像計測法や画像処理法、レーザー光を用いた指紋検出法、大規模火災などの燃焼実験や燃焼解析、爆発物の分析や威力評価法、列車など機械構造物の破壊事故原因解明手法などの研究開発や、これらを応用した鑑定・検査である。

法科学第三部では、犯罪の捜査に関連する化学の研究や実験、鑑定・検査を行っている。具体的には、覚せい剤などの乱用薬物や毒物の分析法、ガラス片や繊維片などの微物の分析法、化学兵器用剤や有毒性ガス検知法などに関する研究開発、これらを応用した鑑定・検査である。

法科学第四部では、犯罪の捜査に関連する心理学および精神医学の研究や実験、文書類や偽造通貨の鑑定に必要な技術の研究や実験、これらのほか犯罪の捜査に関連する情報科学の研究や実験と、これらを応用した鑑定・検査を行っている。具体的には、ポリグラフ検査に関する心理生理学的な研究、筆跡鑑定や印章鑑定に関する研究、改ざん文書の検査法、偽造印刷物検査法、偽造通貨鑑定、音声による個人識別手法、音声の明瞭化（防犯ビデオに録音された犯人の音声の明瞭化など）手法などの研究開発と、鑑定・検査である。法科学第四部の研究は、人間が学習により獲得した個人特徴をもとにした個人識別に関するものであるがこの分野は、心理学や脳研究、情報工学との共同研究により成果が期待されている分野でもある。

犯罪行動科学部では、少年の非行防止や犯罪の防止に関する研究や実験、犯罪の捜査の支援

に関する研究や実験を行っている。具体的には、少年の非行防止や健全育成のための少年非行の原因や背景を明らかにする研究や、少年非行対策や少年保護対策に関する実証研究、犯罪予防のための犯罪の背景要因の実証研究、子どもの安全に関する研究、地理的犯罪分析手法の開発、人質事件における犯人や被害者の心理分析・説得交渉技術の分析、犯罪者プロファイリングの研究などを行っている。このように、犯罪行動科学部では、捜査支援に関する研究のほか、犯罪の予防に関する研究も行われている。犯罪行動科学部の行う研究も、心理学、社会学、教育学などの観点から行われるものが多く、応用心理学とのかかわりも深い。

交通科学部では、交通事故の防止その他交通警察についての研究および実験、交通事故に係る犯罪の捜査についての研究および実験と、これらを応用する鑑定・検査を行っており、交通科学部においても、鑑定・検査のほかに、事故防止に関する研究が行われている。具体的には、運転者の行動特性の工学的分析に基づく事故防止、公害防止、交通円滑化などのための研究、高齢者・子ども・事故や違反を起こした運手者への交通安全教育など事故防止に関する心理学や人間工学的な研究、交通事故分析、自動車の運動特性と安全性に関する機械工学的な研究などである。交通科学部で行われている研究も、心理学や工学など多くの研究領域とかかわっており、応用心理学とのかかわりも深い。

附属鑑定所では、高性能の分析機器を活用して、犯罪現場に残された微量の資料から犯罪の事実を立証するため、銃器弾丸類、偽造貨幣、覚せい剤の微量成に関する鑑定・検査を行っている。

科学警察研究所で行う鑑定

科学警察研究所では、都道府県警察の科学捜査研究所や裁判所、検察庁等から嘱託を受けた鑑定を行っている。これまでに科学警察研究所が行った鑑定には、オウム真理教関連事件におけるサリン等に関する鑑定など、世間から大きな注目を集めた事件の鑑定も含まれる。

鑑定・検査は科学警察研究所における主要な活動のひとつであるが、警察が扱う事件の鑑定は、大半が都道府県警察の科学捜査研究所で行われる。ただし、これには例外があって、偽造通貨と銃器・弾丸類については、各都道府県警察が捜査の過程で押収したものすべてが科学警察研究所に送付され、鑑定されることとなっている（国家公安委員会規則）。これは、偽造通貨や銃器・弾丸類は、都道府県を超えた広域で使用されることが多く、また事件相互の関連性の有無が重要であるので、一元的に鑑定を行う必要性があるからである。

おわりに

昨今の犯罪情勢をみると、情報化社会の利便性を逆手に取った犯罪手口の巧妙化・悪質化や犯罪のグローバル化など、従来の犯罪とは異なる特徴をもった犯罪が増加しているように思われる。これらの犯罪に対処するためには、犯罪防止にはもちろん、捜査手法の開発においても、広い視野をもった研究や施策を進める必要がある。また、高度な検査手法や検査機器の開発も重要課題である。犯罪には必ず人間がかかわっていることから、人間の行動特性を知ることも犯罪捜査や事件・事故の防止に有用である。このため、今後の犯罪情勢に対処するには、犯罪科学と心理学との連携の必要性がますます高まると思われる。応用心理学は、心理学および関連領域で得られた諸知見を社会問題の解決のために応用することを目的としていることから、犯罪科学の目的と重なる部分が大きいと考える。今後、犯罪科学と応用心理学が連携していくことにより、安全・安心な社会の実現をはかることを期待している。

CROSSROAD
私と応用心理学
ESSAY

②

基礎心理学の視点から応用心理学を考える

基礎心理学の視点を常に意識して

「私と応用心理学」を、大いに迷いはしたものの結局は引き受けしてしまったために、この夏が大変悩ましいものになってしまった。

私が日本応用心理学会の会員になったのは、助手として白梅短大に在職しながら早稲田大学の大学院で学んでいた頃のことである。白梅の教授でいらっしゃった大脇園子先生に勧められたのがきっかけであった。大脇先生は当時、電話回線に入ってくる雑音の効果についての実験をされており、私はそのお手伝いをしていた。しかしその後大脇先生は白梅を去られ、私と応用心理学会の関わりは途切れてしまい、長い間会員とは名ばかりであった。それは私が応用心理学というよりも、学習や思考心理学の基礎研究を領域としていたからである。しかし応用心理学会の大会を白梅で開催することが決定したときから、応用心理学会との関わりが再び始まった。当時たまたま学科長をしていたために私は大会会長をお引き受けすることになり、これをきっかけとしてあらためて、応用心理学会と深く関わることになった。

それ以来昨年までほぼ20年、今は立正大の心理学部長である齊藤勇氏と大学生の社会的欲求や帰属についての研究を毎年欠かさず大会に発表してきた。応用心理学的な研究との接点のなかった私が、このように研究の面でも多少とも関わり続けて来られたのは齊藤先生のおかげである。これには先生のお嬢さんと私の息子とが保育園で一緒であったという幸運なおまけがついている。電話では、研究の打ち合わせの傍ら、よく息子と娘についての情報交換をしたものである。齊藤先生には大いに感謝している。

この春私は定年を迎えた。考えあぐねた末に退職記念講演のテーマを、“私の愛した微小予期目標反応：行動心理学と認知心理学の狭間で”としたのであるが、まったく独りよがりなテーマである。「微小予期目標反応」とはなにと思われる方がほとんどであろう。これは条件づけを基本として学習理論を構築したC.ハルが提唱した内的反応の一種である。このテーマで私は、条件づけを基本とする学習心理学から認知心理学へと傾いていった私自身の思考過程についての苦い思いを話したのであるが、まったく応用心理学的な話ではない。

2006年に文京学院大学で行われた大会の特別講演は、京都大学霊長類研究所の松沢哲郎教授の『進化の類人ヒトとチンパンジー：子育てと親子関係』であった。チンパンジーの母親が育てた子どもの認知発達的研究について、知識や技術の世代間伝播の研究が紹介された。その際私は松沢教授に、チンパンジーの親子間や個体間の行動の理解に、観察学習理論による説明はされないのですか、というような質問をしたことがある。かなり以前にNHKで放送された松沢先生の「ことばを覚えたチンパンジー」では、チンパンジーのアイがオペラント条件付けの手法によってことばを獲得していく過程が紹介されていたことから、なにかそのような学習理論による説明があるのではないかと期待していたからだと思う。この質問のおかげで松沢先生からチンパンジーの素敵な絵葉書セットをいただいた。もちろん、質問の内容に対してではなく、質問をしたこと、その行動に対してご褒美を下さったのである。講演が終わったところで駒沢大学の小野浩一先生が私に、正確には覚えていないのだが、「先生はやはり学習心理学だったのですね」といわれた。私はこのとき「そうなんだなぁ」と思い、「見透かされているなぁ」と感じた。そして内心、「小野先生もそうでしょう」と反応していたのではあるが。

私は応用心理学会に所属し、積極的にその運営に関わりながら、専門は「学習・思

荻野七重
（日本応用心理学会理事）

おぎの・ななえ◉
1939年千葉市に生まれる。1971年早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程単位取得満期退学。1963年白梅学園短期大学心理技術科に助手として就任。講師・助教授・教授を経て、2010年3月退職、白梅学園大学名誉教授となる。1992年日本応用心理学会第59回大会委員長。1997～2003年同学会事務局長。現在同学会理事。

考心理学」であり、応用心理学者とはいえない中途半端な応用心理学会員である、という意識をもち続けてきた。さらに言えば、私はこうして、応用心理学会に深く関わりながら基礎心理学の視点を常に意識してきたのである。

日本応用心理学会第77回大会に参加して

この9月に京都大学で開催された大会は楽しいものであった。「私と応用心理学」というテーマをいただいていたこともあって、応用心理学会のなかに身を置くときにいつも感じる“中途半端な自分”を一層強く意識し、「応用心理学を基礎心理学の視点から考える」という位置にどっぷりとつかってしまった3日間であった。

大会第1日の午前、記念企画シンポジウム「発達保障論の成り立ち・現在・展望：糸賀一雄のラストメッセージ」は、近江学園やびわ湖学園の創立者である糸賀一雄氏の思想がいかに問題の本質をしっかりととらえたものであり、それを生かす努力がその後どう引き継がれ今も生きているかということが中心的話題であった。私はこのような方面のことに疎く、この講演を通して糸賀一雄氏の思想をはじめて知ることができた。しかし実は、終始応用心理学とは、基礎心理学とはという疑問を反芻していた私はシンポジウムの根幹とは少し離れた別の話にひっかかってしまった。それは指定討論者の田中真介先生の次のような話である。子どもの発達には1歳半のところに1つの節目がある。子どもの前で、掌を上にしてそれを握ったり開いたりしてみせる。上に向けたこのような開き方をチンパンジー開きというのだそうだが、次に子どもに同じように握ったり開いたりしてみるように促すと、1歳半を過ぎた子どもはできるがそれよりも下の子どもはできない。しかし1歳半の子どもでは、子どもの手首のところに手を添えてあげるとできる、というのである。「できる」と「できない」との間にともすると見逃してしまうこのような事実が存在するというのだ。私はこの話に興味をひかれた。この夜、懇親会の席で田中先生を捕まえ、1歳半の子どもにこのようことがあることを理論から導いたのかたまたま気がつく機会を得たのかとお聞きした。田中先生の答えは、発達理論から1歳半が1つの節目あるとは考えていたが、手を添えるという方法が隠れた可能性を表面化するということはたまたま見出したことだといわれた。私は企画記念シンポジウムの間、「ここに応用心理学と基礎心理学の“クロス”がある」と思い、その考えというのか感覚というのか、それを単純に楽しんでしまっていたのである。

今回私は2つの研修会に参加した。研修会A「応用心理学の課題と理念：産業心理学を中心として」（松陰大学越河六郎教授）と研修会B「応用心理学における測定誤差と心理査定をめぐる諸問題について」（文京学院大学松田浩平教授）である。越河先生は労働研究とは何かという問題を取り上げられ、安易に行われやすい「現場への接近」に対する懸念を語られた。松田先生は応用心理学の研究に多数用いられている調査や心理測定における誤差の問題を取り上げられた。2つの研修会は共通して、応用心理学的研究に求められる真摯な研究態度を促すものであった。応用心理学が単なるマインドコントロールのテクニックになること、研究が技法の安易な適用に陥ることへの警鐘、懸念を示されたものと思う。

日本応用心理学会には異なるさまざまな研究領域があるが、領域を越えて共通の問題意識があり、論じられるところが魅力である。さらに加えて、基礎と応用の接点が問題となるとき、それは基礎心理学を専らとしているものにとっても無関係ではない。

私は自分や周囲の人の日常行動のなかに学習心理学の基礎的な知識や理論の事例をみつけたいと絶えず考えている。日常生活における心理学的基礎知識の実例探し、それは基礎と応用がクロスし、小さな光を発する瞬間をみつけることであり、私の日常的でささやかな応用心理学であり楽しみである。

海外最新事情

第27回 国際応用心理学会大会に参加して

大森哲至
（横浜国立大学大学院
国際社会科学研究科研究生）

去る2010年7月11日から16日、第27回国際応用心理学会大会がメルボルンで開催されました。今大会では従来の発表形式である「シンポジウム」「パネル・ディスカッション」「論文付き個人口頭発表」と併せて、新発表形式として「簡易口頭発表」「電子ポスター発表（Electronic Posters）」などが加えられ、私はそのなかの電子ポスター発表で2つの研究発表を行いました。

魅力的だったメルボルン

学会の開催は7月11日となっていましたが、飛行機の予約が取れず、日本を出発したのは11日の夜となりました。約11時間の長旅を終え、翌日の午前11時半頃ようやくメルボルンに到着しました。

空港から外に出ると、快晴でしたが南半球は冬ということもあり、さすがに肌寒さを感じました。はじめてのメルボルンの印象は、古い建物と新しい建物が混在し、美しさと斬新さを合わせもっていました。そして街の所々に白い木肌をもつユーカリ科の大木が生え、イギリス調の街並みに独特の雰囲気を醸し出していました。

ここでメルボルンの簡単な説明をしますと、オーストラリア大陸の南東部に位置するメルボルンはヴィクトリア州の州都であり、オーストラリア全体ではシドニー（約400万人）に次ぐ第2の人口を誇ります（約337万人）。市内には450もの公園があり、別名「ガーデンシティ」とも呼ばれています。

写真1 メルボルンのヤラ川を背に

また人口の4分の1が世界各国から集まっているといわれるメルボルンは、移民の街としても有名です。そのため、ショッピング、グルメ、エンターテイメントなど幅広く世界各国の文化が展開されていました。なかでもグルメについては、南半球最大の「食の都」と称されるだけあって、何を食べてもおいしいと感じました。メルボルンはこれまで（2002、2004）「世界で最も暮らしやすい都市」に選ばれた街としても有名ですが、そうしたのどかな雰囲気やおいしい食事が、たくさんの人々を引きつけるのだと納得しました。

今後への大きな刺激となった学会参加

初日は、簡単な観光を終え、午後にはホテルに到着し、その後すぐに受付に向かいました。受付は英語でということもあり、不安もありましたが、スムーズにネームタグと冊子、肩掛けバッグ（サッチェル）を渡してもらいました。そして、EPostersのブースへ向かい、日本でアップロードした2つのポスターの確認をしました。確認方法は、サーチの部分に氏名などキーワードになる単語を入れれば検索が容易にでき、とても便利でした。そして、無事確認をすませ、ほっとしたところで、長旅の疲れもあり早々にホテルに戻りました。

2日目、会場には朝早くからすでにたくさんの人が訪れていました。私はまずポスターに関する質問の確認をしようと思い、EPostersのブースへ向かいましたが、まだ質問などはありませんでした。その後、会場の見学をし、昼食もとり終わった後、幾つかの簡易口頭発表を聞きました。そ

れぞれの発表では、国籍や年齢を問わず活発な議論がなされており、大会の醍醐味を間近で味わうことができた満足感でいっぱいになりました。

3日目、私は日程の都合で、この日がメルボルンで過ごす最後の日となりました。この日は午前8時半から日本応用心理学会企画のシンポジウム「Measures to Aging in Japan」に参加しました。数人の先生方による英語での研究発表を聞き、新しい知識を得ることができました。質疑応答でも意見交換などが活発に交わされ、とても興味深く耳を傾けました。そのような活気溢れる会場の様子を目にし、私ももっと率先して参加したいという意欲をかき立てられ、午後は他国の研究者の方に声を掛け、充実した時間を過ごすことができました。そして今回このような場に参加できたことは、私にとっても次回開催されるパリでは口頭発表に挑戦してみたいという思いを起こさせる、大きな刺激となりました。

三宅島の研究成果を発表

今回の大会で、私は「The Repeating Natural Disaster and the Mental Health of the Survivors」と「The Repeating Natural Disaster and PTSD of Survivors」の2つの発表を行いました。私の研究活動も含め、今回発表したテーマについて少し説明をさせていただきます。これまでの研究活動では、2000年三宅島雄山噴火の被災者を対象とし、繰り返される災害が被災者の精神健康にどのような影響をおよぼすのかについて研究をしてきました。そして、今年は2000年の噴火から、丁度10年という節目の年を迎えました。

2000年の噴火は従来の三宅島の噴火活動の典型とは異なり、山頂の陥没、火山ガスの放出、長期的な活動など世界の火山観測史上でもきわめてまれな噴火でした。それらの被害は、住民に4年5ヵ月に及ぶ全島避難生活を余儀なくしただけでなく、現在も国の環境基準値を越える火山ガスの放出があるなど、災害が継続している状況です。

日本における自然災害の被災者の精神健康をテーマとした研究の歴史は浅く、1990年代に入ってから精力的に実施されるようになりました。そうした背景には、1990年代に、長崎県雲仙普賢岳噴火、北海道南西沖地震、阪神淡路大震災など大規模災害が多発したことにあると考えられます。

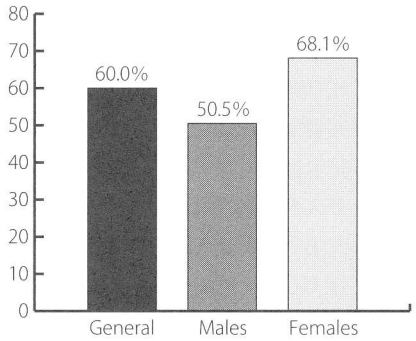


図1　ハイリスク者の比率

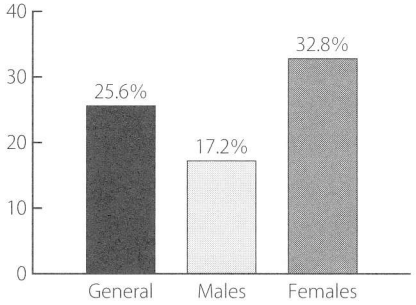


図2　PTSDの疑いのある被災者の比率

そして、阪神淡路大震災を契機にPTSD（外傷性ストレス障害）やこころのケアという言葉が社会に浸透するなど、現在ではその認知だけではなく、支援活動も充実されてきました。しかしながら、先行研究を概観しますと、そのほとんどが災害直後の被災者の精神健康を対象とし、いずれも単一の自然災害に襲われた被災者の精神健康についての知見であり、三宅島のような繰り返される自然災害下で生活する被災者の精神健康に関する問題はほとんど研究されていません。そのため、今日の災害研究において、被災者の長期的影響に関する知見の積み上げや体系化をしていくことも重要な課題であると考え、精神健康調査票（General Health Questionnaire）やPTSD尺度（IES-R）などの測定尺度を使用し、多角的な検討から繰り返される災害と被災者の長期的な影響との関連を見出すことを目的とし、研究に取り組んでいます。

以上のような経緯を踏まえ、今回の「The Repeating Natural Disaster and the Mental Health of the Survivors」では、昨年実施した噴火から9年後の精神健康調査票の調査結果、また、「The Repeating Natural Disaster and PTSD of Survivors」では、PTSD尺度の調査結果について発表

しました。主要な結果についてまとめますと、精神健康調査票の結果では、噴火から9年後のハイリスク者の出現率は60.0％であり、依然として高い出現率が認められました（図1）。またハイリスク者の発生に寄与するリスク要因を分析した結果、火山ガスの影響で未だに自宅に戻ることができない、火山ガスの影響で仕事の現状が順調でないなどの要因がその出現率に関与していることが認められました（図2）。一方のIES-Rの結果についても、住民の25.6％にPTSDの疑いが認められ（DSM-Ⅳ（1994）ではPTSDの生涯有病率は1～14％と報告されています）、こちらも高い出現率が認められました。またPTSD群と非PTSD群の差異を特徴づける要因について分析した結果、精神健康調査票と同様に火山ガスの放出によって、仕事の回復が順調でない人にPTSDの疑いが多くみられました。これらのことから、三宅村住民の精神健康の悪化の背景には、継続する火山ガスの放出がコミュニティや仕事の回復を困難としていることなどがあると考えられ、繰り返される災害が被災者の精神健康に長期的（持続的）な影響をもたらしている可能性が推察されました。

先述したように、今年は2000年の噴火から10年という節目の年を迎えました。しかし、その一方でこの10年という歳月は、時間的推移と共に次第に多くの人々の記憶からこの噴火に対する印象が薄れていっているように思われます。現在の三宅島では、依然として災害が継続しているにもかかわらず、法的な支援措置では被災者生活再建支援法や東京都三宅島災害被災者帰島生活支援制度などの適用が終了し、住民は自助的な回復を強いられているのが現状です。そのため、今回の発表を通じて、日本の方だけではなく少しでも多くの海外の方々にも、やもすれば忘れがちとなる自然災害の被害状況や被災者の生活再建の困難さについて関心をもっていただく契機になればと思っていました。その点については、予想以上に大会期間中、会場を訪問した方々の関心を得られたようで、多くの閲覧数を確認することができました。また帰国後も各国の研究者の方々から英文による論文の問い合わせをいただき、今後の更なる研究活動の大きな励みとなりました。この場をお借りし、お礼を申し上げます。

大森哲至（おおもり・てつし）◉1973年生まれ。横浜国立大学大学院国際社会科学研究科企業システム専攻博士後期課程修了（経営学博士）。現在、横浜国立大学大学院国際社会科学研究科研究生として在学中。専門は自然災害の被災者の精神健康などを対象とした災害心理学の分野で、現在は三宅島をフィールドとして研究活動に取り組んでいる。

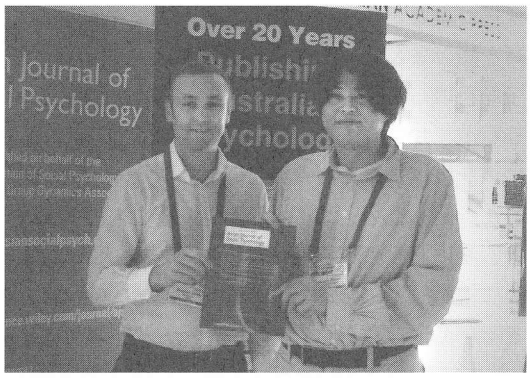


写真2　大会会場にて

学会を振り返って

全体を通して、メルボルンは気候も良く、街の雰囲気もとても良かったです。物価が高い印象がありましたが、食事は何を食べてもおいしく、名物のオージービーフやシーフードなども十分に堪能することができました。またオースラリアの方は、街頭で地図をみていると気さくに声を掛けてくれたり、買い物に行っても笑顔で話し掛けてくれるなど皆とても親切でした。とても充実した時を過ごすことができました。

学会では、さまざまなカテゴリーの発表が実施され、参加したいずれの発表も非常に興味深いものばかりでした。また会場では、国籍や年齢、性別を問わず声を掛け合い、国際学会ならではの光景を至る所で目にしました。私も他国の研究者と交流を深めることで、今後へ向けての研究意欲が一層高まりました。

最後になりますが、本大会を滞りなく運営してくださった大会スタッフのご尽力に心から感謝致します。ありがとうございました。そして、本大会の発表に至る過程では、多くの三宅島の方々からの励ましとご協力をいただきました。深くお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

心理学から見たおすすめDVD紹介

①『911ボーイングを捜せ』

◎2004年、50分（＋ボーナス映像28分）、定価2,625円（税込）、企画＝グローバルピースキャンペーン、制作＝ハーモニクスプロダクション

②『9/11：真実への青写真』

◎2010年、58分、定価2,100円（税込）、企画=グローバルピースキャンペーン、制作=ハーモニクスプロダクション

③『911の嘘をくずせ Loose Change 2nd edition』

◎2006年、82分、定価2,100円（税込）、企画=グローバルピースキャンペーン、制作=ハーモニクスプロダクション

2010年9月11日に日本応用心理学会第77回大会で開催された公開シンポジウム「911の子どもたちへ」で、京都大学経済学部の西牟田祐二先生の次に、私も911事件の真相究明ドキュメンタリー①②を学生にみせたあとの態度変容について報告しました。

衝突したのは旅客機ではなかった？

①は、2001年9月11日の当日の映像に基づいています。ペンタゴン（米国防総省）が受けた被害から考えて衝突したのは旅客機ではないという疑い、などこれまでのマスコミでは報道されなかったさまざまな疑惑を問題提起しているビデオ・DVDで、日本では初期に紹介されたものです。このドキュメンタリーを制作し解説しているのは米国のミズーリ州にある小さなラジオ局『ザ・パワー・アワー』を放映しているデイヴ・ヴォンクライスト氏で、彼は、ある日インターネットでペンタゴンや世界貿易センター（WTC）ビルに激突したのは旅客機ではない、と主張するサイトをみつけました。そのようなばかなことはないと反論するために、ニュース映像、市販のDVD、写真集や書籍を集めるうちに、不可解な事実を発見していきます。政府発表や、事件の翌日からは放映されなくなったニュース映像などの数しれない疑問。彼はさまざまな疑問を、すでにマスコミや軍・政府が公表した映像や写真をもとに問題提起したのです。

ビル崩壊は人為的な「制御解体」？

②みなさんは、911事件で崩壊したWTCビルはいくつだったか覚えていますか？　ツインタワーの2棟は記憶にあることと思います。でも正解は3棟です。47階建ての第7ビル（ソロモンブラザーズビル）も当日夕方に全体が崩壊したのです。

このDVDは米国建築家協会会員で、自らもいくつかのビルを設計した建築家のリチャード・ゲイジ氏の講演の記録です。911事件でのWTCビルの崩壊原因をさまざまな映像や科学的証拠を用いた10の根拠に基づいて、衝突と火災という公式説明によるものが真の原因ではなく、人為的な「制御解体」だと結論づけています。この結論には制御解体の専門家も同意しています。なお、第7ビルが崩壊する20～30分前に英国放送協会（BBC）が「第7ビルが崩壊しました」と勇み足の誤報を行った映像は、今でもYouTubeでみることができます。西牟田先生はこのDVDの20分短縮版をつくって応用心理学会で上映されました。

主犯は本当にオサマ・ビン・ラディンか？

③も、911事件の公式発表に異を唱えるドキュメンタリーの1つです。これは、ニューヨークの20代前半の若者3人によって制作され公開されているものです。オサマ・ビン・ラディンが主犯だという米国政府の公式見解が、疑わしいものであることを映像で説得的に説明してあります。この映像の効果は現在学生と分析中です。

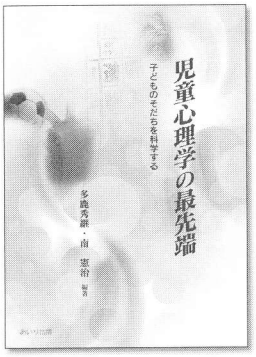
メディア・リテラシーを育てる教育の重要性

メディアを読み解くメディア・リテラシーを育てる教育は重要です。それは、メディアに直接接したときのリテラシー（マイクロシステム）とともに、マス・メディアの構造的バイアスについてのリテラシー（マクロシステム）の両方の観点が必要です。今回紹介した3点のDVDは、メディア・リテラシーの両側面を考える良い材料を提供してくれます。

いとうたけひこ　和光大学教員。教育学博士（東北大学）。著書・訳書に『平和学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『スクールカウンセリングの新しいパラダイム』『プログラムを成功に導くGTOの10のステップ』（風間書房）、『コミュニティ・カウンセリング』（ブレーン出版）、等がある。

『児童心理学の最先端―子どものそだちを科学する』

多鹿秀継・南　憲治＝編著



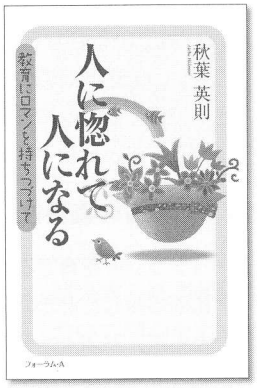
2009年7月発行
あいり出版
本体価格1900円

幼稚園や小学校の教諭などを目指す学生のための児童心理学のテキストとして、多鹿秀継氏との共編で出版した。本書は、大学での半期15回の講義を念頭に3部構成の15章からなっている。まず第1部（1章から3章）では「児童理解の基礎」と銘うち、児童心理学の概念や理論そして研究法などを紹介している。次の第2部（4章から13章）では、記憶や思考それに社会性などの児童の各特性の発達と子どもの障害について理解できるようにした。最後の第3部（14章と15章）では、児童の発達に大きな影響を与える家庭環境と学校の問題について論じている。全体を通して本書は、教職を目指す学生にとっての必須の知識から最先端の児童心理学の成果までを幅広く学ぶことができるように、中堅から気鋭の若手の執筆陣が最新のデータと理論をもとに執筆している。

南　憲治◉帝塚山大学現代生活学部こども学科教授。専門は発達心理学、神経心理学。

『人に惚れて人になる―教育にロマンを持ちつづけて』

秋葉英則＝著



2009年8月発行
フォーラムA
本体価格1143円

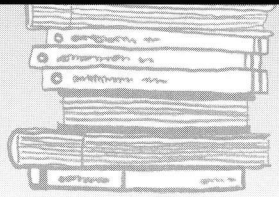
拙著を自分が語るというのは恥じ入ることですが、日本応用心理学会からの要請とあらば、学徒としてそれなりの責任を果たさねばならないだろうと思いペンを執っています。

本書の刊行に至る成り立ちは、本書「エピローグ」に記したとおりである。教育心理学なる学的基盤から大学人として約40年の歳月を過ごしいわゆる定年を迎えた者の足跡のひとこま、1コマの記録といっていいだろう。あえてその事実にこだわって世に伝えたいことは何かと問われたら拙者は次のようにいい切ることによって自分のこれまで、今、これからを述懐するキーワードとして意味づけることになると思う。

そのキーワードこそ、“一期一会”でありそのことに耐えうる教育実践の創造を担っている、と。

私ごとを赦していただけるならば、古稀を迎える老教師の教え子は、定年を迎える年齢になっていた。そんなことは想像だにしていなかった。彼らは訪ねてきて話してくれた。「先生、子どもにホレテ、ホレラレル、デスヨネ」と。

秋葉英則◉大阪健康福祉短期大学学長。専攻は教育心理学（人格形成）。



『インテリ公害―日本人の出直しのために』

中里至正・松井　洋＝著

2010年2月発行
グラフ社
本体価格1300円

「日本の子どもがおかしい」。20年ほど前に私たちが調査を始めたきっかけである。当時、非行、いじめ、校内暴力など子どもの問題がマスコミをにぎわしていたが、私たちが注目したのは普通の中高生の価値観や生き方の問題であった。

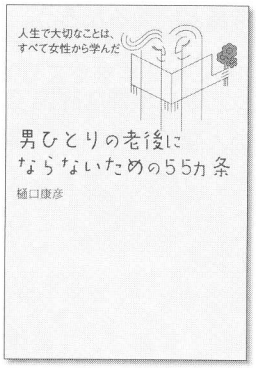
国際比較調査を繰り返すと、日本の子どもの道徳や価値観などに歪みがあることがわかった。調査を始めて20年以上たつので、今やほとんどの日本人の生き方が問題だといえる。

私たちは調査データを基に分析してきたが、問題のルーツを探るために一度データから離れて考えてみた。すると、戦後に異文化を無批判に輸入して喧伝し伝統的な心情を壊したこと、象徴的にいえば「インテリ公害」という問題が根底にあると気がついた。むろん、インテリだけの責任ではないのだが、たとえば「自分らしさ」という価値観を喧伝し過ぎたことが若者の自己形成を妨げたのではないか。このように、何がどのような価値観の歪みを作り、それが日本のどのような問題を引き起こしたのか分析してみたのが本書である。

松井　洋◉川村学園女子大学教授。専門は社会心理学、文化比較。

『男ひとりの老後にならないための55ヵ条―人生で大切なことは、すべて女性から学んだ』

樋口康彦＝著



2010年2月発行
青志社
本体価格1200円

ここに2人の青年がいるとする。A君：①最初のデートでは好きな映画や音楽の話をして無難に過ごす。②周囲の女性からは「A君はいい人だから、2人きりになっても絶対に襲われない」と信頼されている。B君：①最初から口説く。「自分が相手の女性にとって理想の男性であるはずがない。したがって最初のデートで恋愛感情をインストールできなければ次はない」と思っている。②周囲の女性からは「B君は手が早いから、デートなんかしたら何をされるかわかったもんじゃない」と恐れられている。

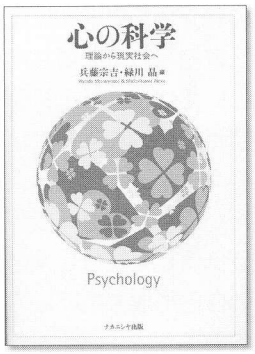
ルックスが互角だとしたら「モテ」に関してはB君がA君を圧倒することだろう。またこれ以外に、自信に満ちた物腰、服装と髪型がカッコイイこと、背筋がピンっと伸びていること、笑顔があること、が必須となる。

本書は私にとって婚活シリーズの4冊目だ。どの本にも私も含めて女性と接するのが苦手な男性が無事に結婚でき、したがって孤独な老人にならずにすむための秘技・秘術が満載されている。

樋口康彦◉富山国際大学国際教養学部。専門は社会心理学（達成動機について）。

『心の科学―理論から現実社会へ』

兵藤宗吉・緑川　晶＝編



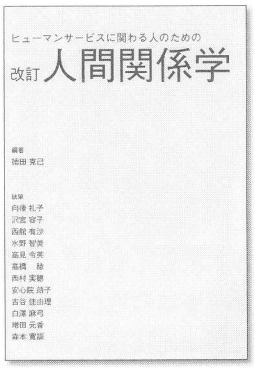
2010年2月発行
ナカニシヤ出版
本体価格2520円

本書は大学の教養課程などで心理学にはじめて触れる人たちを対象に書かれたものだが、とりわけ、心理学専攻ではないけれど心理学をぜひ学んでみたい、という人を想定して企画された。そのため本書では、心理学の基本的な概念の説明に留まらず、ふだん自分たちが経験するさまざまな事象と結びつける形で各単元の説明を行うように心がけた。また、より詳しく勉強したいが周囲に相談できる人がいないことも考慮し、「この領域を知るために」と「さらに発展させるために」の２つの参考文献の項目を設けて学習の一助とした。このように、本書は心理学の学びの出発点となるだけではなく、次なる段階へバトンタッチができるように配慮されている。なお、本書は若手の研究者を中心に執筆されたので、そのことを活かし、著者たちが実際に携わっている最新の研究にも触れ、心理学研究の醍醐味を感じ取ってもらえたらと思っている。

緑川　晶◉中央大学文学部准教授。専門は神経心理学。

『ヒューマンサービスに関わる人のための　改訂　人間関係学』

徳田克己＝編著



2010年4月発行
文化書房博文社
本体価格2000円

看護・医療・教育・保育・福祉など、いわゆるヒューマンサービスに携わる専門職の人々の実践に役立つように書かれた“ハウツー本”である。

ただし、巷にあふれる多くのハウツー本と異なり、内容はすぐれて科学的。社会心理学、臨床心理学、発達心理学、教育心理学、精神医学に関する最新の知見が明快かつ具体的に紹介されている。

ヒューマンサービスの対象者についても、その心理的、生理的、社会的特性を論じるとともに、人間関係で配慮すべきことなど、実践的ノウハウに言及している点は、まさに本書ならではの特長といえるだろう。

すなわち、ヒューマンサービスに関わる者にとって最も重要な課題である「よりよい人間関係をいかに構築すべきか」という問いに対する答えが、きわめてわかりやすくまとめられているのである。

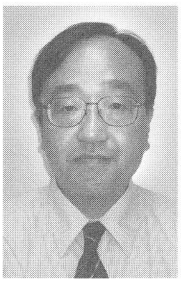
よりよい人間関係をつくるための、エビデンス（実証）に基づいた具体的な方法を知りたい方に、ぜひ読んでいただきたい。

沢宮容子◉立正大学心理学部教授。専門は、臨床心理学、カウンセリング心理学、認知行動療法。

応用心理士として各方面で活躍する先生方に、
その活動を語っていただくコーナーです。

からみあうニーズとシーズ

廣島克佳



ひろしま・かつよし
◉ 1958年生。1983年立教大学大学院文学研究科心理学専攻課程（前期）修了。同年、防衛庁技官（研究職）として航空自衛隊入隊。1995年応用心理士資格取得（第10号）。現在、航空自衛隊・航空開発実験集団・航空医学実験隊・第3部主任研究官兼第4部主任研究官。日本応用心理学会、日本心理学会、日本リスク研究学会、ヒューマンインタフェース学会、各会員。

はじめに

私は1983年以来、航空自衛隊において心理学とその関連領域を含む多様な調査研究に従事して来た。そのために心理学領域内外のさまざまな勉強をし、多くの学会に出入りし、若干の発表および論文でその成果を公開した。だが、散発的なテーマを漫然と渡り歩いたのではない。以下にこれまで配属された部署とそこで行ってきた調査研究等の概要を年代順および領域毎に記すが、シーズ（seeds：科学・技術の各要素）と組織ニーズの変遷およびニーズとシーズのからみ具合を読み取って頂ければ幸いである。

1983年～：航空安全管理隊　教育研究部

▌組織の概要

航空安全管理隊は、1971年に発生した全日空機と航空自衛隊ジェット戦闘機の空中衝突事故（雫石事故）を契機とし、航空自衛隊での航空事故を大幅に減少させることを目的として1982年に作られた飛行安全推進の専門組織である。

▌リスクマネジメント

事故の人的要因についての文献的取りまとめおよび指揮官の交代によって航空事故の発生頻度が上がるか否かの検討を命じられた。分析技法の未熟から後者ではこれという結論が得られなかったが、その後の事故の時系列分析へつながって行った。なお、自ら提案したものであれ命じられたものであれ、研究成果は何らかの形で教育や施策へ反映されていったのであり、以降も同じである。

▌バードストライク対策

鳥と航空機の衝突対策研究を命じられたが、当時は鳥類の認知機能に関する知見が乏しく、心理学の観点からは十分な結論を出せなかった。鳥が航空機を認知して回避することは期待できないため、飛行場からの餌や休み場の排除に注力すべきことを主張できるようになったのは、25年後である。

▌安全教育

操縦者等を対象として毎年度実施される教育課程（飛行安全幹部課程）において基礎的な知覚領域の講義を行った。また、部内の飛行安全雑誌に心理学関連の記事をいくつか掲載した。安全雑誌への寄稿は、27年後の現在も時折行っている。

1985年～：航空安全管理隊　航空事故調査部

▌組織の概要

それまでは事故発生部隊が実施していた航空事故調査を、より科学的かつ公平な観点から実施するために新設されたのが航空事故調査部である。

▌航空事故調査

航空自衛隊で発生した航空事故の調査官として、24件の航空事故調査に従事した。当時は年に平均数名の航空機搭乗員が殉職していた。事故に至るまでの航空機搭乗員等の行動と事故の人的要因との因果関係を明らかにするために、関係者との面談、交信記録の解析（声帯振動周波数の計測等）、御遺体や救命装備品（救命ボートや脱出装置）の調査を行った。

▌事故調査技法改善

交信記録解析技術の向上研究を行い、無線送信が終了する際に生ずるノイズの発生メカニズムの解明等を行った。NHKからの依頼によりロサンゼルス空港で発生した航空大事故の交信記録の分析を行い、その内容はテレビニュースで全国放送された。

▌リスクマネジメント

統計数理研究所の講座受講の機会を得て地震の時系列分析を学び、その知識を元にオンラインデータベースにアクセスし、航空事故および関連新聞記事の出現間隔を1991年に分析した。また、長期研修を受講した際の小研究課題として、宝くじに関わるリスク認知を扱った。

ここまでの勤務の間、航空自衛隊の航空事故率は減少していない。この間の私の仕事は、航空事故に対する安全管理において科学的マネジメントサイクル（特にcheck、actionの各段階）を確立することだったといえる。

1993年～：航空開発実験集団 航空医学実験隊　第1部

▌組織の概要

航空開発実験集団は航空自衛隊が使用する防衛装備品の試験や応用的な研究を行う組織であり、航空医学実験隊は、航空医学、心理学および人間工学の面を担当する。

▌ヒューマンインタフェース

今後の防衛装備品はコンピュータ化されるだろうと考え、TRONプロジェクト等コンピュータ技術およびヒューマンインタフェースに関心をもち始めた。F-2支援戦闘機の試験の一部として、機体の塗装色決定のための実験およびコンピュータ化された操縦席のユーザビリティ評価の支援を命じられた。上空からの雲や地表等の輝度測定および機体の視認性の評定実験を行い、その結果に沿って機体色が決定された。

▌事故の人的要因

航空事故の重大な要因の1つとして、操縦者が自機の客観的な姿勢に応じた行動ができなくなる空間識失調現象があるが、この現象やアクション・スリップ等が解離現象の一種であろうとの仮説を立て、機械制御のプログラミングの勉強の成果を生かして実験を行った。この仮説は現在も検討中である。

▌メンタルヘルス

阪神淡路大震災後のPTSD概念の普及により、航空自衛隊でもメンタルな問題への対策を行うべきとの機運が高まり、予備的な文献調査を1996年から行った。

▌適性選抜

操縦者候補者を選抜する検査の心理面接官業務を毎年度実施した。選抜試験等の改善が必要になるだろうと考え、従来からの性格検査や知能検査データの再分析を手がけ始めた。

1998年～：航空安全管理隊　教育研究部

▌安全教育

年2回ずつ行われる飛行安全幹部課程での航空心理の教育を全て担当した。この際、航空場面での行動に即しつつ心理学の全領域を満遍なく簡潔に解説し、受講者が知識を主体的に利用できるように講じた。これはエンパワーメントを意識したのであり、受講者に好評だった。この他に、年に数回各部隊を訪問して2時間程度の各種安全教育を実施した。

▌リスクマネジメント

リスク判断支援技法であるOperational Risk Management（ORM）の導入が始まっていたため、これまでの仕事はリスクマネジメントの一部であることに気がつき、リスク学の勉強を始め、関連学会へ論文を投稿した。また、事故要因の総合的な分析法の研究を命じられ、多変量解析によって事故要因を分析し対策することが可能であり、この際に事故要因の定義が重要である

ことを報告した。

この勤務期間の間に航空大事故が頻発したため、航空自衛隊全般で安全対策が再検討、強化され、その後急激に航空事故発生頻度が低下し、大事故が年に1回程度となった。航空安全管理隊が発足して20年目頃であり、以降はこの水準を維持している。

▌メンタルヘルス

2000年から航空自衛隊のトラウマに関する調査研究を命じられ、IESや日本版GHQ30等を用いて調査を行った。同年、故・村井健祐日本大学教授も委員の1人として参加されていた検討会から自衛隊員のメンタルヘルスに関する提言が出され、防衛庁としてメンタルヘルスを実施する方針が固まった。今の防衛省のメンタルヘルス施策は、この提言や各種内部研究等に基づくものである。

▌適性選抜

心理面接官業務を継続した。5因子性格論が定説となりつつあったので、従来から用いていたYG性格検査の再検討を開始した。また、新規採用技官の心理学専門試験の問題作成を何度か担当し、結果を数量化Ⅲ類等を用いて分析した。

2005年～：航空開発実験集団 航空医学実験隊　第3部

▌メンタルヘルス

IES、IES-RおよびGHQ30の因子構造等の見直しおよびストレス尺度統合の試作研究を行っている。この時、共分散構造分析を本格的に勉強したが、これは後の知能構造の高次因子分析等が必要な適性選抜改善研究に大いに役に立った。

▌リスクマネジメント

航空自衛隊の新たな任務として、災害等において重症患者を固定翼機を用いて長距離搬送することの検討を開始したが、この際に必要な各種要因・技術等の研究を命じられた。当初は研究チーム全体の統制・調整役を果たし、半ばからは安全に機内での医療活動を行うための研究を担当した。

▌適性選抜

操縦者候補者の適性選抜検査を改善する研究を命じられ、その一部としてYG性格検査の分析を完了した。性格領域での改善研究は概ね終了し、現在は知能領域の検査改善の研究を行っている。なお、この適性選抜研究が開始されたのは、性格検査の見直しを内々に開始してから13年後である。

そして、これから

技術の進歩と環境の変化が著しい現代においては、自ら問題を発見し、他者と協同しつつ解決を行うことの重要性が増している。今後はこのような要員を育てるためのhuman resources研究を推進すべきだ、と考えている。

日本応用心理学会認定「応用心理士」2010年度後期資格認定申請のご案内

「応用心理士」認定審査委員会

本誌の「応用心理士の現場」では、応用心理士資格を生かして活躍する会員の皆様をご紹介しています。多種多様な分野で心理学の知見を発揮される会員が1人でも多くなりますよう、ぜひ資格の取得をお勧めします。

本資格申請は、「学会入会後2年を経た」時点で可能です。

学会で認定する「応用心理士」は、学会員の専門職としての資質があると認められた証明になります。

認定の要件は、「応用心理士」資格申請の手引き（第6版）に記載の通りですが、**次の各号の1つに該当するかを踏まえ委員会で認定するものです。**

（1）学校教育法において定められた大学または大学院において、心理学専攻又はこれに準ずる分野を卒業あるいは修了した者（学位授与機構の審査により学士の学位を授与された者も含む）。

（2）本学会機関誌「応用心理学研究」に1件以上の研究論文を発表した者、又は本学会の年次大会において2件以上の研究発表をした者。

（3）認定審査委員会が応用心理学と関係あると認めた専門職で、3年以上の経験を有する者。

（4）応用心理学と関係ある職で3年以上の経験を有し、本学会研修委員会企画の「研修会」に5回以上参加した者。

■ 資格申請の手続き

以下の順序に従って申請の手続きをお願いします。

1 ハガキで「資格申請書類を希望する」と「返送先」を明記し、事務局まで請求してください。

2 申請書類の請求がなされると、必要書類が希望者に送付されます。受け取られたら、申請書類に所要事項を記入し、同封の封筒で送付してください。

3 審査料10,000円は、郵便為替で送金してください。

郵便振替の振込先

口座番号　00110-6-359059

加入者名　日本応用心理学会

（注）申請書類一式のなかに同封されている郵便為替用紙をご利用ください。

4 提出する申請書類は次の通りです（提出の際確認してください）。

① 様式1（資格認定申請書）

（注1）所定の枠内に証明書用カラー写真（ヨコ3cm×タテ4cm）を貼付してください。

（注2）裏面に審査料の振込金受領証をコピーして貼付してください。

② 様式2-1（履歴書）

③ 様式2-2（業績書）

④「研修会」参加を資格要件とする場合は、「受講証明書」5回分を添付してください。

5 認定委員会では、提出書類について審査し結果を文書にて申請者に通知します。

合格した人は認定料30,000円を納入してください。

入金されますと「応用心理士」認定証を交付し、本学会機関誌「応用心理学研究」に掲載して公表します。

今年度後期の受付期間は、12月末日です。

2011年度前期の受付締め切りは、5月末日です。

日本応用心理学会認定「応用心理士」事務局
〒169－007
東京都新宿区高田馬場3－8－1
東京富士大学応用心理学研究室内
E-mail: ukiya@fuji.email.ne.jp

国際交流委員会委員長◎内藤哲雄

第27回国際応用心理学会大会（メルボルン）報告

第27回国際応用心理学会大会は、オーストラリア心理学会との共催で、2010年7月11～16日に、メルボルン会議・展示センターで開催されました。参加者3,400名、参加国67カ国、発表数3,223件という規模の大きな大会でした。

日本応用心理学会企画のシンポジウム「日本に於ける高齢化の実情と対策（Measures to Aging in Japan）」は、大会4日目の14日午前8時30分、日本時間では同7時30分開始の早朝にもかかわらず30名を超える参加者があり、盛会でした。

今回の大会ではじめて採用され、最大の発表数を消化する電子ポスター発表は、ロビーのパソコンからポスター（パワーポイント6ページがPDF化されたもの）にアクセスして、発表者にEメールで質問し、日時と会合場所を打ち合わせるならば大会期間中いつでも会って、質疑応答できるという目玉のはずでした。ところが、大会会場そのものは広いのですが、写真1をみていただけばわかるように、パソコンは通常のデスクトップで、片面5台、両面で10台のみ。質問をする人からのEメールは大会発表申込時に登録した本国のアドレスに送信され、受信を確認したい参加者は写真2のようにネットカフェに並んでチェックしていました。実際にはほとんどの人が他の研究者と討議できず、評判はあまりよくなかったようです。最大の収穫は、高額の旅費を使って海外の大会会場に集合しなくても、「本国にいたままで国際学会の電子ポスター発表が可能である」のを実証したことだといえるでしょう。国際学会だけでなく、国内学会での大会開催においても利用可能な発表形式です。

他方の観光に関しては、真冬にもかかわらず屋外でも厚手のブレザーで十分だったこともあり、市内だけでなく郊外のツアーを楽しんだ人も多かったようで、大会会場には大会参加数から想定されるほど多くの人がいませんでした。

■ 応用心理学研究英文特集号への投稿について

投稿資格や執筆規定等の詳細については、学会のホームページを参照してください。ホームページへの掲載が遅れたこともあり、申込締め切りが1カ月延長されました。

（1）投稿資格は、本学会の会員であり、かつ第27回国際応用心理学会で研究発表した方です。また当該投稿論文の連名者は、第27回国際応用心理学会大会での連名発表者に限るとともに、本学会会員であることを要します。

（2）投稿論文の受付締め切りは2011年2月28日（消印有効）です。

■ 次回第28回国際応用心理学会大会日程

次回の第28回国際応用心理学会（ICAP2014）は、4年後の2014年7月8～13日に、フランス・パリで開催されます。すでに大会案内のホームページが開設されており、今後、徐々に情報が追加されます。

Web：www.icap2014.com

写真1　電子ポスターを閲覧する大会参加者

写真2　ネットカフェで本国に送信されたEメールを確認

編集委員長◎川本利恵子

機関誌編集委員会からのお知らせ

日本応用心理学会会員の皆様には、機関誌「応用心理学研究」にいつも変わらないご支援・ご協力を賜りありがとうございます。

先般、2010年9月11日、12日に日本応用心理学会第77回大会が開催され、盛会に終わりました。この大会ではポスター研究発表が多かっただけでなく、自主企画のワークショップも多く応募されておりました。近々、これらの成果が機関誌「応用心理学研究」に投稿されるのではないかと密かに期待しております。

ところで、既に皆様ご承知と思いますが、機関誌の編集委員会の体制が変わっております。2010年4月より、私こと川本委員長のもとに、深澤伸幸先生を副編集委員長とし、新たな体制で編集業務をすすめることになりました。深澤副編集委員長の研究室に「編集事務局」を設置し、そこで一括して投稿論文を受け付け、編集業務を行っていくことになりましたが、半年を過ぎた現在もなお深澤副編集委員長には大変お手数をかけております。また、もうひとつ変更した点は、編集事務局に論文投稿と編集について総合的なアドバイザーを行う補佐役をおいたことです。補佐役は藤田主一副理事長にお願いしましたが、一昨年度までの編集委員長ですので、まさに適任です。力強い補佐役ですが、編集委員と査読者および論文投稿者からの相談にと幅広く対応していただくことになっておりますので、困った時・迷った時は積極的に御相談していただきたいと思います。

以上が大きな変更点ですが、これまで進めていた審査の6部門（①原理・認知・感情部門、②教育・発達・人格部門、③臨床・福祉・相談部門、④健康・スポーツ・看護・医療部門、⑤犯罪・社会・文化部門、⑥産業・交通・災害部門）体制は継続しております。各部門では、それぞれ2名の責任委員を中心に査読の手配と編集業務を進めております。機関誌は、年間2号（秋期と春期）を発行しますが、4月末ころまでに投稿された場合には9月ごろ（秋期）発行号、10月末までに投稿された場合には翌年3月ごろ（春期）発行号に向けて査読を行う予定となっております。

さて、各部門責任者は適切な査読者2名を選定し、査読を依頼します。2名の査読者のうち1名が不採択の判断を下したときには、第3の査読者を立てて査読を継続するなど、審査の公平性を担保するように努めております。また不採択の場合でも、その理由を投稿者に返すことになっております。

審査期間は査読状況によって異なりますが、1回修正の場合、約3カ月から4カ月かかります。投稿後受付から分野の識別と部門責任者への配送までが、約2週間程度、その後、査読者決定後、1回目の審査期間までに約5週間（査読者）、その後1回目の修正期間が約3週間（投稿者）かかります。修正後の2回目以降の審査期間は約3週間（査読者）となり、2回目以降の修正期間は1～2週間を目安としていますので、さらに長期間が必要となってくるわけです。これらは順調に経過した場合での目安なので、実際はもう少し時間がかかります。いずれにしましても、査読が完了した時点で「採択通知」ないし「不採択通知」が送られます。

最終原稿を受領したのち、編集委員長および編集事務局に審査完了報告が行われ、編集委員会で掲載する論文リストを確認します。編集委員長と編集事務局で機関誌全体の編集作業を進め、実際に皆様のお手元に届くまではさらに時間がかかります。そこで、これらの審査過程を通過し、機関誌に掲載された時は喜びも倍増します。論文掲載までには、時間と投稿者の粘り強い掲載意欲が求められますが、会員の皆様が積極的に投稿されることを歓迎します。

委員会としては、今後も会員皆様が投稿しやすい内容、運営方法について検討することはもとより、さらに一歩踏み出して、現在社会が抱える諸問題を特集号として取り上げ、会員の皆様が広く関心をもてるような誌面作りをすることも視野に入れておりますので、ご支援のほどよろしくお願い申しあげます。

■ 投稿論文の送付先：「編集事務局」
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場3－8－1
東京富士大学　経営学部
ビジネス心理学科　深澤伸幸研究室気付
「日本応用心理学会 機関誌編集委員会」
TEL：03－3362－1229（研究室代表：内線314）
E-mail：n-fukazawa@fuji.ac.jp

日本応用心理学会学会賞選考委員会委員長◎藤田主一

2010年度日本応用心理学会学会賞について

日本応用心理学会では、「学会賞」を2部門（論文、実践活動）に分け、隔年で選考を行います。理事が本学会会員のなかから候補を推薦し、学会賞選考委員会がまとめたものを常任理事会に提案し、最終的に常任理事会の決定となります。本年度の選考は新制度になってから2度目です。

■「学会賞」（論文部門）

推薦の対象は、『応用心理学研究』第33巻第2号～第35巻第2号までの6冊に掲載されたすべての論文等です。

推薦・審議の結果、2010年度の日本応用心理学会「学会賞」（論文部門）は、下記の論文に決定しました。

著　者

櫻井美由紀・岩崎祥一（東北大学大学院情報科学研究科）

論文名

視覚・聴覚の二重課題における注意の偏りについての研究

掲載誌

『応用心理学研究』第33巻第2号、73 － 83、2008

講　評

自動車運転中の携帯電話使用がなぜ事故につながるかを実証的に論じたものである。厳密な実験計画により、運転中の携帯電話による会話が前方視覚的注意を減少させることを左右大脳半球の情報処理の観点から検討し、興味深い知見が得られている。このことは、交通安全に対する意識の改善に直結し、自動車事故の撲滅に向けて役立つものであり応用心理学研究として高く評価できる。

■「学会賞」（実践活動部門）

審議の結果、2010年度の「学会賞」（実践活動部門）は「該当なし」という結論になりました。

事務局だより

名簿の送付について

会員の皆様に会員名簿をお送りいたしました。記載内容について修正や変更がある場合には、速やかに事務局までご連絡をお願いいたします。

事務局

〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4－4－19　国際文献印刷社内

TEL　03-5389-6491　FAX　03-3368-2822　E-mail　jaap-post@bunken.co.jp

日本応用心理学会の入会申込書を次にご案内しますので、入会を希望する方はお申し込み下さい。
このページをコピーし必要事項を記入して、下記事務局宛までご郵送下さい。

日本応用心理学会入会申込書（正会員用）

申込年月日（20　　年　　月　　日）

フリガナ		推薦者（正会員） ㊞	
氏　名			
ローマ字		性　別	男　　女
		生年月日	19　　年　　月　　日
現住所	〒		
	電話番号	（　　）	
最終学歴	［　　年　　月］【在学中のものではなく、卒業あるいは中退・修了したもの】		
所　属	名　称		
	所在地	〒　　電話番号　（　　）	
	職名・身分		
研究領域			
メールアドレス			
備　考			

◉記入上の注意

1. 楷書で正確に記入して下さい。
2. 正会員の入会資格は、会則第4条第2項に次のように定められています。
   (1) 4年制以上の大学で心理学およびその隣接分野を専攻した者
   (2) 第1号に準じる者
   (1) の隣接分野とは以下の分野を指しています。
   教育学、児童学、人間関係学、体育学、社会学、社会福祉学、芸術学、宗教学、医学（心身医学、精神医学、行動医学など）、看護学、経営学、認知科学（人工頭脳など）、人間工学、など。
   (1) の入会資格に該当しないと判断される場合は、備考欄に高等学校卒業後の学歴および職歴をできるだけ詳しく書いてください。(2) の第1号に準じる者と認めることができるかを判断する資料とします。記入欄が不足したときは別紙に書いて添付してください。
3. 社会人学生の場合には、在学大学（大学院）名等詳細を備考欄に記入してください。
4. 推薦者には、必ず、署名のうえ捺印してもらってください。
5. 推薦者がいないなどの相談がある場合は、学会事務局にご連絡ください。

日本応用心理学会事務局：〒169-0075　東京都新宿区高田馬場4-4-19　㈱国際文献印刷社内
電話：03-5389-6491　FAX：03-3368-2822　E-mail：jaap-post@bunken.co.jp

事務局受付〔　　〕　審査〔　　〕　本人連絡〔　　〕　会費納入〔　　〕

原稿募集

『応用心理学のクロスロード』では、皆様の原稿を募集してます（執筆者の紹介・推薦も受け付けてます）。

● 募集コーナー

①「ホープ登場　クロスロードの星」
対　　象　応用心理学を研究中の大学院生
原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）

②「大学探訪　研究室におじゃましました」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

③「職場探訪」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

④「CROSSROAD ESSAY」
原稿字数　3000字以内（写真、図表を含む）

⑤「海外最新事情」
原稿字数　4800字以内（写真、図表を含む）

⑥「心理学から見たおすすめDVD紹介」
原稿字数　1300字以内（写真、図表を含む）

⑦「BOOK REVIEW　本を出しました」
対　　象　2010年3月～2011年3月の間に刊行分の会員の書籍（自薦・他薦は問いません）
原稿字数　430字以内

⑧「応用心理士の現場」
原稿字数　4500字以内（写真、図表を含む）

⑨「その他」
本誌の感想・意見、日本応用心理学会へのメッセージなど

● 3号の原稿締切　2011年2月28日

（※4号以降に掲載させていただく場合もあります）

● 応募方法

原稿は、連絡先（住所、電話、メールアドレス、所属）を必ず明記して、お送り下さい。デジタルデータの場合はメール添付ファイルにてお送り下さい。掲載の採否については広報委員会で決定させていただきます。なお、お送りいただいた原稿は返却いたしません。予めご了承下さい。

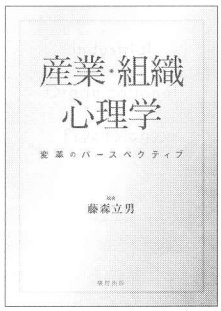
● 送り先

［郵送］
〒240－8501　横浜市保土ヶ谷区常盤台79－4
横浜国立大学　藤森研究室気付　日本応用心理学会
「応用心理学のクロスロード」原稿募集係

［E-mail］　fujimori@ynu.ac.jp
件名に「応用心理学のクロスロード」原稿応募とお書き下さい。

産業・組織心理学

変革のパースペクティブ



編著■藤森立男（横浜国立大学大学院教授）
松本真作・藤田主一・松田幸弘・村橋卓也
大森哲至・田中堅一郎・今城志保・山本 寛
島津美由紀・池田 浩・丸岡吉人・小林幹児
中山雅之

定価2,520円（本体2,400円+税）

A5判／並製／272頁
ISBN978-4-571-25037-8

激動する社会環境に企業が適応していくためのヒントを提示

個々人が働く意識を高めた高学歴社会では、旧来の企業運営は通用しない。今の時代に求められる柔軟な組織論を最新研究より紹介、個人と組織の関わり方を各方面より論じる。

1 ワークモチベーション：仕事への動機づけ　2 職場のコミュニケーション　3 変革のリーダーシップ　4 職場の対人関係　5 ストレスとメンタルヘルス　6 経営の意思決定　7 採用面接と人事評価　8 人的資源管理とキャリア開発　9 職務満足と組織の活性化　10 組織変革の戦略　11 広告戦略　12 マーケティング戦略　13 ITビジネス戦略　14 危機管理の戦略

福村出版　〒113-0034 東京都文京区湯島2丁目14番11号
TEL 03-5812-9702　FAX 03-5812-9705
http://www.fukumura.co.jp

ヴィゴーツキーに学ぶ 新刊
子どもの想像と人格の発達

中村和夫〈著〉
定価2,625円（本体2,500円＋税）　ISBN978-4-571-23050-9
ヴィゴーツキーの想像の発達についての議論に焦点を当て、人格発達理論としてヴィゴーツキー理論を論証。

成人学習理論の新しい動向 新刊
脳や身体による学習からグローバリゼーションまで

シャラン・B・メリアム〈編〉
立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子・荻野亮吾〈訳〉
定価2,730円（本体2,600円＋税）　ISBN978-4-571-10153-3
生涯にわたる学習を実践する人々に、新たなビジョンを与え、毎日の行動をナビゲートする手引書。

図で理解する
生徒指導・教育相談 新刊

佐々木雄二・笠井 仁〈編著〉
定価2,205円（本体2,100円＋税）　ISBN978-4-571-24040-9
児童生徒の様々な心の問題の理解とその対応を、実践経験豊富な臨床心理学者が多面的視点から解説。

対人援助学の可能性
「助ける科学」の創造と展開

望月 昭・サトウタツヤ・中村 正・武藤 崇〈編〉
定価2,205円（本体2,100円＋税）　ISBN978-4-571-25038-5
障害者、高齢者、犯罪加害者への援助理論を実践記録から検証。心理・福祉・社会学に跨る「対人援助学」を探る。

日本応用心理学会 第78回大会のご案内

大会日程 2011年9月10日（土）～11日（日）

会　場 信州大学人文学部

連絡先 〒390-8621　長野県松本市旭3－1－1
信州大学人文学部　大会準備委員長　内藤哲雄

広報委員会（五十音順）

委員長　藤森立男　横浜国立大学
委　員　内山伊知郎　同志社大学
加藤博己　駒澤大学
田中真介　京都大学
蜂屋　真　流通科学大学
星　薫　放送大学

編集後記

「応用心理学のクロスロード」2号をお届け致します。多くの会員の先生方やスタッフに支えられ、本誌を発刊することができました。原稿のご執筆をお引き受けいただきました先生方に深く感謝申し上げます。なかでも、白梅学園大学名誉教授の荻野七重先生には7月にメルボルンで開催された国際応用心理学会でお目にかかる機会がございました。その折りに「この夏は悩ましいものになりました」というお言葉をいただき、大変申し訳ない気持ちで一杯になりました。しかし、本誌の28、29頁を拝見致しますと、7月のメルボルンでの苦悩は9月に京都で開催された日本応用心理学会第77回大会で「応用心理学と基礎心理学のクロスを発見する」ためのギフトではなかったかと愚考致しております。今後も、応用心理学がさまざまなものとクロスするストーリーをお届けしたいと考えております。会員の皆様のご協力を心からお願い申し上げます。

応用心理学のクロスロード　Vol.2

（年2回発行）

編集・発行　日本応用心理学会
〒169-0075
東京都新宿区高田馬場4-4-19
TEL　03-5389-6491
FAX　03-3368-2822
E-mail　jaap-post@bunken.co.jp
HP　http://wwwsoc.nii.ac.jp/jaap/

編集協力・製作　福村出版株式会社
デザイン　有限会社 臼井デザイン事務所
印刷・製本　モリモト印刷株式会社

2010年12月1日　発行

性犯罪の行動科学

ー発生と再発の抑止に向けた学際的アプローチー　田口真二・平　伸二・池田　稔・桐生正幸編著　A5・280頁・3360円　実態が把握しづらい「性犯罪」という現象。犯罪・進化・社会・臨床分野の心理学や統計学・医学の専門家が，科学的エビデンスに基づいて，発生要因や被害・加害に関する研究成果を紹介する。

少年非行の行動科学

ー学際的アプローチと実践への応用ー　小林寿一編著　A5・264頁・2625円　少年非行・犯罪について，臨床心理学のみならず，従来手薄だった，発達・社会・コミュニティ・組織心理学等の領域の心理学，さらには犯罪社会学や生物学の知見を組み込み，少年非行におけるエビデンスの活用を主張する。

心理学教育のための傑作工夫集

ー講義をおもしろくする67のアクティビティー　L. T. ベンジャミン・ジュニア編　中澤　潤・日本心理学会心理学教育研究会監訳　A5・352頁・2940円　歴史，統計，研究法から知覚，意識，学習，思考，パーソナリティ，ジェンダーといったテーマまで，受講者参加型のアクティビティを幅広く収載。

人間科学のための混合研究法

ー質的・量的アプローチをつなぐ研究デザインー　J. W. クレスウェル・V. L. プラノ クラーク著　大谷順子訳　A5・336頁・3465円　研究プロセスの各段階において，質的・量的アプローチでデータを収集・分析・混合し，各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

北大路書房

〒603-8303
京都市北区紫野十二坊町12-8
☎075-431-0361　FAX 075-431-9393
http://www.kitaohji.com
振替 01050-4-2083
▶価格は定価(税込み)で表示しています

認知心理学研究の現在を一望！　**現代の認知心理学〔全7巻〕**　日本認知心理学会 監修

第1巻　知覚と感性　三浦佳世 編
第2巻　記憶と日常　太田信夫・厳島行雄 編
第3巻　思考と言語　楠見　孝 編
第4巻　注意と安全　三浦利章・原田悦子 編
第5巻　発達と学習　市川伸一 編
第6巻　社会と感情　村田光二 編
第7巻　認知の個人差　箱田裕司 編

●各巻A5判・約350ページ・予価3,780円

応用心理学事典

日本応用心理学会　編　　編集委員長：岡村一成
A5判・692頁　定価21,000円(税込)　ISBN978-4-621-07807-5

細分化された現代心理学の諸分野の研究水準を浮き彫りにし、今後の研究活動に有効な情報を提供。心理学に関心を持つ方が心理学に対する偏った知識を無くし、社会においてさまざまな問題解決に役立ち、読み物としても楽しめる待望の中項目事典。

カウンセリング実践ハンドブック　新刊2010年11月刊行

編集委員長　松原達哉　　日本カウンセリング学会　編集協力
A5判・700頁　予定価15,750円(税込)　ISBN978-4-621-08301-7

心理学の理論から開発されたカウンセリングの理論や技法をいかに実践するかを集大成。カウンセリングの基礎と共通概念からさまざまな場面における重要テーマを抽出し、わかりやすく2～4頁で解説、最新情報が網羅されたハンドブック。◎**臨床心理士、スクールカウンセラー、家裁調査官、児童相談員、精神科・心療内科スタッフなどに役立つ内容。**

産業・組織心理学ハンドブック

産業・組織心理学会　編
A5判・582頁　定価13,650円(税込)
ISBN978-4-621-08118-1

社会学事典

日本社会学会社会学事典刊行委員会　編
A5判・976頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-08254-6

応用倫理学事典

加藤尚武　編
A5判・1008頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-07922-5

宗教学事典　新刊2010年11月刊行

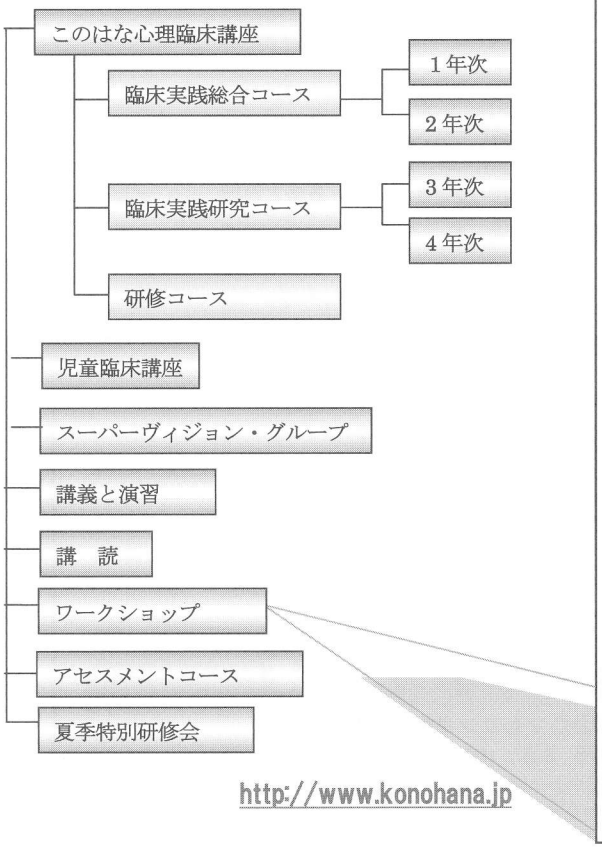
星野英紀・池上良正・氣多雅子・島薗　進・鶴岡賀雄　編
A5判・700頁　定価21,000円(税込)
ISBN978-4-621-08255-3

Ⓜ MARUZEN　丸善株式会社　出版事業部
〒140-0002 東京都品川区東品川 4-13-14 グラスキューブ品川　営業部TEL(03)6367-6038 FAX(03)6367-6158
http://pub.maruzen.co.jp/

このはな心理臨床セミナーのご案内

このはな児童学研究所は、1987 年に人間性の土台となる＜子どもなるもの＞を生かした人間全体にかかわる心理臨床の場として、また研究の場として開所いたしました。
心理臨床セミナー部門では、心理臨床家に向けて、質の高い教育を保証した講座が開催され、多くの優れた心理臨床家が育っています。

このはな心理臨床セミナー　カリキュラムチャート



http://www.konohana.jp

2010年度　ワークショップ　申込受付中

10/10　ひきこもりと内閉する青年の心理査定と心理療法
米倉五郎（愛知淑徳大学）

10/17　ユング心理学からみた心的外傷の理論と実践
リース・滝・幸子（ロサンゼルス・ユング研究所）

10/17　面接に生かせる見立ての技術　岡　昌之（首都大学東京）

11/7　心理療法のテクスチャー　猪股　剛（群馬大学）

11/21　スピリチュアリティーとセラピー　長野興子（聖心会）

11/28　演習とロールプレイ　氏原　寛（帝塚山学院大学）

12/12　現実に介入しつつ、心に関わる　田嶌誠一（九州大学大学院）

1/9　派遣と委託での心理療法　河合俊雄（京都大学）

1/16　コラージュ療法入門　森谷寛之（京都文教大学）

1/30　面接に転機をもたらす要因　村瀬嘉代子（北翔大学大学院）

2/6　ウィニコットの臨床の知
賀陽　濟（西東京心理療法研究所）長谷川雄一（目白大学）

3/13　こころの中の姉と弟、兄と妹 Sister-Brother 元型を考える
豊田園子（天理大学）

【受講料】各２万円

2010年度　児童臨床講座　申込受付中

2/18,2/25,3/4　【V期】児童臨床の総合性　岡　昌之（首都大学東京）

【受講料】１万５千円

心理臨床相談部門では、分析心理学を基本においた創造的カウンセリングを行っています。必要に応じて、またご希望に応じて、対話によるカウンセリング、夢分析、箱庭・絵画・イメージ療法、遊戯療法、家族面接等、最善の方法を適用しています。

日本橋心理相談室　**赤坂オフィス**　**札幌心理相談室**　**フリースクールこのはな学舎**

＜セミナー・心理相談のお申し込み、お問い合わせ、パンフレットのご請求は下記へ＞

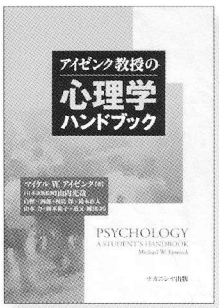
このはな児童学研究所　〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町 2-26-2-403

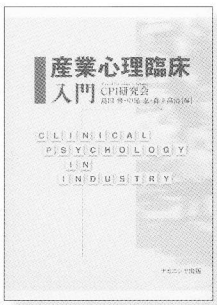
TEL03-3639-1790　FAX03-3639-2968　E-mail　konohana@konohana. jp

アイゼンク教授の心理学ハンドブック

マイケル・W・アイゼンク　著
日本語版監修　山内光哉
白樫三四郎・利島保・鈴木直人・山本力・岡本祐子・道又爾　監訳

アイゼンク教授がたった一人で書き上げた現代心理学入門の決定版、待望の邦訳！　二三一〇〇円





産業心理臨床入門

CPI研究会・島田　修・中尾　忍・森下高治　編

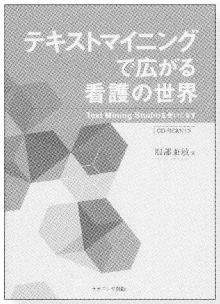
企業社会の中で働く人々のメンタルヘルスケアを実践するにはどうすればよいのか。職場でのメンタルヘルスの理論と実践について、産業場面の第一線で活躍する臨床心理士たちがわかりやすく解説する。　二九四〇円

テキストマイニングで広がる看護の世界

Text Mining Studioを使いこなす

服部兼敏　著

テキストマイニングの分析実践を画像を駆使して懇切丁寧に解説。アンケートやインタビューを活用するための必携書！CD-ROM付　三六七五円



PAC分析研究・実践集1

内藤哲雄・井上孝代・伊藤武彦・岸太一　編

特定個人の個別事例を質的・記述的に分析するPAC分析を最大限有効に使うために、その理論と技法をわかりやすく概説し、多領域に及ぶ研究例や実践例をリーディングスとしてまとめ、効果的な利用法を具体的に示す。　二六二五円

増補改訂版　産業・組織心理学エッセンシャルズ

外島　裕・田中　堅一郎　編

理論的な研究の紹介を中心に、それらを応用し実践していくきっかけとなるようにわかりやすく説明。各章末に代表的な研究例、巻末にこの研究領域の歴史・研究の流れをやや詳しく紹介。　二九四〇円

コミュニティ心理学入門

植村勝彦　編

多様なコミュニティの中で生起する社会問題に積極的に取組み、人が本来もっている強さとコンピテンスを重視しながら人々のエンパワメントを支援していく新しい心理科学、決定版入門書！　二五二〇円

心理臨床、現場入門

初心者から半歩だけ先の風景

髙橋紀子・吉岡和子　編

社会人1年生。初めてなのに専門家。この不安と緊張を先輩たちはどう乗り越えていったのか。教育・医療・福祉・司法・産業、これらの現場に一人で入っていった新米臨床心理士たちの奮闘記。　二二〇五円

改訂版PAC分析実施法入門

「個」を科学する新技法への招待

内藤　哲雄　著

従来の科学論に変革を迫る理論と技法！人文・社会科学から工学・自然科学にまで適用可能なイメージ構造の事例的分析に不可欠の書。　一八九〇円

大学生のキャリア発達

未来に向かって歩む

宮下一博　著

希望に満ちた人生を送るには、大学生のいま何をすればよいのか。進路・職業・人生に関するワークシートで自分の現状を知り、キャリアに関する諸学者の理論を学び、一歩リードした就職活動を示す。　一五七五円

心の発生

認知発達の神経科学的理論

月本　洋　著

人工知能研究、言語学、心理学、脳科学、哲学の各領域を横断しながら「身体運動意味論」を提唱。斬新な視点から「言葉」と「模倣」に注目し、心の発生の謎に迫る！　二五二〇円

成人発達臨床心理学ハンドブック

発達臨床心理学の視点から人間を理解する

岡本祐子　編著

発達心理学と臨床心理学の観点から人間が大人として人生を生き抜くことの様々な心の局面をとらえ、その光と影について考察する。　五〇四〇円

教育心理学

西口利文・髙村和代　編著

教育の最前線である学校における教育活動にフォーカスしつつ、教育心理学の基本から最新知見まで徹底網羅。授業の学びを深め、活かせる便利な予・復習課題付きの初学者必携テキスト！　二四一五円

体験で学ぶ社会心理学

吉田俊和・元吉忠寛　編

多数派に流される判断やステレオタイプなものの見方など、社会心理学で説明できる人間行動を身をもって体験しながら楽しく学ぶ。　二一〇〇円

〒606-8161 京都府京都市左京区一乗寺木ノ本町15
ナカニシヤ出版
http://www.nakanishiya.co.jp/
TEL：075-723-0111
FAX：075-723-0095

＜価格は税込＞

● DVD & VHS ●

ビジュアル 社会心理学入門

監修：安藤清志（東洋大学教授）

個人、対人、集団、組織や社会、それぞれのレベルで人との関わりから発生する現象や関係を解説する社会心理学の入門教材です。

社会心理学の基礎的な理論や研究方法などが視覚的に理解できるよう解説、紹介され、社会心理学の全体像を効率的に学ぶことができます。

DVD・VHS　カラー　各巻約25分

価格／DVD・VHS
各巻　63,000円（本体60,000円）

対象：大学、医療・看護・教育機関　他

1 現代の社会心理学　指導：安藤清志（東洋大学）

私たちが日々の生活の中で経験する具体的な問題や代表的な研究例を題材に取り上げながら、現代の社会心理学がどのような問題をどのような方法で研究してきたかを紹介し、研究方法に関しては、実験法や調査法を中心にして、その基本的な原理を解説します。これらの内容を理解することによって、社会心理学の各領域の問題を効率的に学習することができます。

2 社会的認知　指導：外山みどり（学習院大学）

社会生活を営む上で、適切な社会的認知をもつことは、重要な意味をもちます。社会的認知は、様々な社会行動の基礎なのです。対人認知においては、様々な手がかりを用いた推論が行われ、外面的情報以外に、過去経験に基づく知識や固定観念も影響を与えます。その種の推論は、必ずしも意識的に行われているとは限りません。

社会的認知のメカニズムを考察し、認知が現実の場面でどのような役割を果たすかについて考えます。

3 自己　指導：沼崎　誠（首都大学東京）

社会心理学においても重要な研究テーマである自己。

他者との関係の中で自己がどのように形成されるのか（自己概念）、他者との関係の中で自分をどのように評価するようになるのか（自己評価）、自己を意識しているときとしていないときでは他者との関係がどのように変わってくるのか（自己意識）、他者に自分の印象を持ってもらうためにどのようにふるまうのか（自己呈示）、といったことを紹介していきます。

4 親密な対人関係　指導：下斗米　淳（専修大学）

人と人との親密な関係とはどのような状態なのか、親密になっていく条件とは、作り上げた関係が動揺し崩壊に至ってしまうのはなぜ、人間関係の悩ましさはどこから生じるものなのか。

まず親密な対人関係とは何か、対人関係がいかに重要であるかを確認します。その上で、親密化過程に求められる諸条件、対人関係の崩壊、そして対人関係を結ぶことに伴う悩ましさについて考えていきます。

5 援助とサポート　指導：福岡欣治（静岡文化芸術大学）

人に対する思いやりの気持ちの大切さは、誰もが認めるでしょう。しかし一方で「電車でお年寄りに席をゆずる」ことを躊躇する人が少なくないことからもわかるように、人を助けることは実は簡単ではなく、また援助がいつも良い結果をもたらすとは限りません。それでいて、支えとなる人がいることによって、人はしばしば大きな困難をも乗りこえることができます。

本巻が扱う「援助行動」と「ソーシャル・サポート」は、これらの問題を含め「人が人を助け、支える」ことを真正面から扱うトピックです。

6 攻撃と怒り　指導：湯川進太郎（筑波大学）

人はなぜ他者を攻撃するのでしょうか？　攻撃行動には「防衛」「強制」「制裁」「印象操作」といった機能があります。人々は多くの場合、それらにしたがって他者を攻撃します。

私たちはなぜ怒りという感情を抱くのでしょうか？怒りを感じる背景、怒りと攻撃の関連性、怒りをコントロールする方法について、これまでいくつかの考えが提案されています。

攻撃と怒りの基礎的な知識について紹介し、我々が攻撃や怒りとどのように付き合っていけばよいのかを考えていきます。

7 説得と依頼　指導：今井芳昭（東洋大学）

人にちょっとしたことを頼んだり、ある行動を取るよう説得したりすることがあります。逆に、自分が人から頼まれごとをしたり、説得されたりすることもあります。人と人との間で行われる働きかけ、影響の及ぼし合いを対人的影響と呼びます。

対人的影響をキー・ワードにして、その全体像を捉え、特徴的な現象を考察していきます。自分の体験とふだんの生活を対人的影響という枠組みで捉え直してみると理解が深まります。

8 集団と人間　指導：岡　隆（日本大学）

私たちは、それぞれ社会的集団に所属し、その中で、様々な対人相互作用を営みます。同時に、私たちは自分が所属していない別の集団やその成員とも様々な相互作用を営みます。

人はある集団に所属することにより、他の集団成員からどのような影響を受け、どのような関係をつくっていくのか、その人は別の集団やその成員に対してどのように振舞うのか、その人やその人の集団は別の集団との関係性の中でどのように変っていくのかを解説します。

9 組織と人間行動　指導：角山　剛（東京国際大学）

高度化が進み、複雑化する現代社会。インターネットの発達、経済のグローバル化、働く意識の変化など、企業組織をとりまく環境は、さまざまな面で大きく変動を続け、組織と人間行動の関わりを探究することは、その重要性を増しています。

仕事動機づけ、管理者のリーダーシップ、職務ストレスとメンタルヘルスの問題を身の回りの具体例をみながら考えます。

10 集合行動　指導：田中　淳（東洋大学）

都市暴動、パニック、リンチ、うわさ、流行、社会運動…。これらの行動は、すべて集合行動の対象です。21世紀の社会にとって重要な集合行動のひとつが災害過程。災害は稀にしか発生しないゆえに体験したことのない未知の環境に追い込まれ、その厳しい環境に適応し、相互に調整を図っていく必要に迫られます。

過去のニュース映像を交え、それぞれの集団行動はどのようにして起こっていくのかを解説します。

株式会社 サン・エデュケーショナル　〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-22-8 朝日屋ビル9F
TEL.03(5428)5675 FAX.03(5428)5674 URL http://www.sun-edu.co.jp